平成26年度

千葉県

袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書

百々目木（どどめ）Ｃ遺跡第３次調査

向山野（むけざんや）遺跡第９次調査・真里場（まりば）古墳群（こふんぐん）第３次調査

山野貝塚（さんやかいづか）第７次調査

中六（ちゅうろ）遺跡第20次調査

平成27年３月

袖ケ浦市教育委員会

序　　文

袖ケ浦市は、房総半島の中央部、東京湾沿いに位置しています。海岸部が、かつての埋立てとその後の企業進出により、京葉工業地帯の一翼を担う工業地域として大きく変貌を遂げてきた一方で、内陸部は古くからの豊かな自然環境を活かしながら、農業地域を形成してきました。また、半世紀の間に宅地開発も進み、首都圏近郊のベッドタウンとして人口流入があり、周辺の交通網も、東京湾アクアライン、館山自動車道、首都圏中央連絡道の開通により急速に整備され、近年では、袖ケ浦駅海側特定土地区画整理事業や椎の森工業団地２・３期用地整備計画などのプロジェクトが進行しております。

このように発展を続けてきた袖ケ浦には、古代から多くの人々が生活し、特色ある歴史と文化が形成されてまいりました。その痕跡は遺跡という形で地中に保存されております。遺跡は破壊されると二度と元には戻せない貴重なものですが、現代の我々が生活するためには、遺跡に影響を及ぼすおそれのある開発行為も、必要不可欠なものであります。

そこで本市では、昭和63年度から、国および県の補助を受け開発事業者の方々からの協力のもと、開発に先立ち市内の遺跡の発掘調査を実施しております。調査により得られた貴重な成果は、報告書として広く公開し、遺跡を後世に伝える努力を行っております。

また近年では、重要遺跡の保存･活用を目的とした発掘調査も実施しており、市民の方々が遺跡を身近に感じ、郷土の歴史を理解していただくよう、取り組みを進めているところです。

これらの結果をまとめた本書が、埋蔵文化財への理解の一助となり、保護を図るための資料として活用されることを切に願っております。

最後に、発掘調査の実施から発掘調査報告書の刊行にいたるまで、ご指導、ご協力をいただきました千葉県教育委員会文化財課をはじめ、関係者の皆様に対して心から厚くお礼申し上げます。

平成27年３月

袖ケ浦市教育委員会
教育長　川 島　悟

例　　言

1．この報告書は、平成26年度に発掘調査を実施した百々目木Ｃ遺跡第３次調査、向山野遺跡第９次調査・真里場古墳群第３次調査、山野貝塚第７次調査、中六遺跡第20次調査を収録した平成26年度袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書である。

2．調査は、国庫・県費補助事業として千葉県教育委員会の指導を受け、発掘調査から整理作業までの業務を袖ケ浦市教育委員会が実施した。

3．調査ならびに整理作業期間は、下記のとおりである。

百々目木Ｃ遺跡第３次調査　平成26年６月17日～同年６月26日、平成27年１月26日～同年１月30日

向山野遺跡第９次調査・真里場古墳群第３次調査(以下、向山野遺跡第９次調査等)

平成26年10月20日～同年10月27日、平成27年２月２日～同年２月７日

山野貝塚第７次調査　平成26年12月15日～同年12月25日、平成27年２月２日～同年２月20日

中六遺跡第20次調査　平成27年１月19日～同年２月３日、平成27年２月23日～同年２月27日

4．各遺跡の所在地は、下記のとおりである。

百々目木Ｃ遺跡第３次調査　袖ケ浦市蔵波字中ノ代2,911番９他

向山野遺跡第９次調査等　袖ケ浦市飯富字浜海道2,959番１

山野貝塚第７次調査　袖ケ浦市飯富3,516番8他

中六遺跡第20次調査　袖ケ浦市蔵波字木瓜代3,001番5他

5．各遺跡の調査ならびに整理作業・報告書作成の担当者は、下記のとおりである。

百々目木Ｃ遺跡第３次調査　調査：田中大介　整理・報告書作成：田中大介

向山野遺跡第９次調査等　調査：西原崇浩　整理・報告書作成：西原崇浩・田中大介

山野貝塚第７次調査　調査：田中大介　整理・報告書作成：田中大介

中六遺跡第20次調査　調査：諸墨知義　整理・報告書作成：諸墨知義・田中大介

6．報告書で使用した地形図は、以下のとおりである。

第１図　国土地理院発行　1/25,000地形図　奈良輪・姉崎・木更津・上総横田

7．本書で使用したトレンチ名や遺構名は、基本的に発掘調査時のものを使用した。

8．本書の挿図の表記は、便宜上調査次数を(　)で示した。　第３次調査　→　(３)

9．今回の調査に伴う遺物・記録類等は、袖ケ浦市教育委員会で保管する予定である。

10．各遺跡のコードは、百々目木Ｃ遺跡（SG037)、向山野遺跡（SG029)・真理場古墳群（SG114)、山野貝塚(SG110)、中六遺跡(SG013)である。各遺跡の調査は、数次にわたり実施されていることから、遺跡名の後に括弧付けの数字で調査次数を表記することとした(例　百々目木Ｃ遺跡(３)→SG037(３))である。

11．調査から報告書刊行にいたるまで、千葉県教育委員会をはじめとする関係諸機関の方々からご指導・ご協力をいただいた。また、現地での作業においては調査区の土地所有者各位の協力をいただいた。記して謝意を表したい。

目　　次

序文

例言

序　章　調査概要……1

　１．調査に至る経緯　　２．調査経過　　３．調査組織

第２章　百々目木Ｃ遺跡第３次調査……3

　１．周辺の遺跡と環境　　２．調査と遺跡の概要　　３．まとめ

第３章　向山野遺跡第９次調査・真里場古墳群第３次調査……5

　１．周辺の遺跡と環境　　２．調査と遺跡の概要　　３．まとめ

第４章　山野貝塚第７次調査……8

　１．周辺の遺跡と環境　　２．調査と遺跡の概要　　３．まとめ

第５章　中六遺跡第20次調査……21

　１．周辺の遺跡と環境　　２．調査と遺跡の概要　　３．まとめ

挿　図　目　次

第１図　調査遺跡位置図

第２図　百々目木Ｃ遺跡（３）周辺地形図

第３図　百々目木Ｃ遺跡（３）遺構確認状況図

第４図　向山野遺跡・真里場古墳群周辺地形図

第５図　向山野遺跡（９）・真里場古墳群（３）遺構確認状況図、出土遺物実測図

第６図　山野貝塚周辺地形図

第７図　山野貝塚全体図

第８図　山野貝塚（７）Ｈ４－10Ｔ再調査実測図

第９図　山野貝塚（７）Ｈ４－12Ｔ再調査実測図

第10図　山野貝塚（７）出土土器実測図①

第11図　山野貝塚（７）出土土器実測図②

第12図　山野貝塚（７）出土土製品、石器、骨角貝製品実測図

第13図　中六遺跡調査区位置図

第14図　中六遺跡(20)遺構確認状況図

第15図　中六遺跡(20)トレンチ土層断面図、SK151実測図、出土遺物実測図

図　版　目　次

図版. 1　百々目木Ｃ遺跡（３）、向山野遺跡（９）・真里場古墳群（３）

１．百々目木Ｃ遺跡（３）
７トレンチ土層堆積状況

２．百々目木Ｃ遺跡（３）
８・９トレンチ遺構確認状況

３．百々目木Ｃ遺跡（３）
９トレンチ土層堆積状況

４．百々目木Ｃ遺跡（３）調査風景

５．向山野遺跡（９）・真里場古墳群（３）
１トレンチ遺構確認状況

６．向山野遺跡（９）・真里場古墳群（３）
２トレンチ遺構確認状況

７．向山野遺跡（９）・真里場古墳群（３）
第10号墳周溝確認状況

８．向山野遺跡（９）・真里場古墳群（３）
４トレンチ遺構確認状況

図版. 2　山野貝塚（７）①

１．Ｈ４－10Ｔサブトレンチ完掘状況

２．Ｈ４－10Ｔ再調査完掘状況

３．Ｈ４－10Ｔ再調査西壁土層堆積状況

４．Ｈ４－10Ｔ再調査サブトレンチ東壁土層堆積状況

５．Ｈ４－10Ｔ再調査西壁土偶出土状況

６．Ｈ４－10Ｔ再調査Ａサンプル遺物出土状況

７．Ｈ４－10Ｔ再調査Ｂサンプル遺物出土状況

８．Ｈ４－12Ｔ再調査土層堆積状況

図版. 3　山野貝塚（７）②

１．出土土器①

２．出土土器②

図版. 4　山野貝塚（７）③

出土土製品・石器・骨角貝製品

図版. 5　中六遺跡(20)

１．調査前近景

２．表土除去風景

３．調査風景

４．調査区東側遺構確認状況

５．SK151完掘状況

６．SK151土層堆積状況

７．出土土器

８．出土石器

序章　調査概要

１．調査に至る経緯

袖ケ浦市教育委員会では、市内に所在する遺跡について、開発行為に際して事業を行う場所や実施方法を検討する資料を得るために、また、遺跡保存目的の範囲確認のために国及び県の補助金を受けて発掘調査を実施している。

平成26年度は、次の４件について確認調査から発掘調査報告書作成までを実施した。

１　百々目木Ｃ遺跡第３次調査（確認調査）･･･宅地造成に伴う調査

２　向山野遺跡第９次調査・真里場古墳群第３次調査（確認調査）･･･個人住宅建築に伴う調査

３　山野貝塚第７次調査（確認調査）･･･保存目的の範囲確認に伴う学術調査

４　中六遺跡第20次調査（確認調査）･･･宅地造成に伴う調査

２．調査経過

百々目木Ｃ遺跡第３次調査

６月17日：環境整備、基準点測量、仮設トイレ設置、18日：重機搬入、環境整備、トレンチ掘削、写真撮影、19日：トレンチ掘削、遺構確認作業、写真撮影、20日：遺構確認作業、写真撮影、実測図作成、23日：遺構確認作業、実測図作成、写真撮影、環境整備、24日：雨天の為現場作業中止、25日：埋戻し、26日：埋戻し、重機搬出、仮設トイレ撤去

向山野遺跡第９次調査・真里場古墳群第３次調査

10月20日：環境整備、基準点測量、写真撮影、重機搬入、トレンチ掘削、遺構確認作業、21日：雨天のため現場作業中止、22日：雨天のため現場作業中止、23日：雨天のため現場作業中止、24日：遺構確認作業、実測図作成、写真撮影、機材撤去、25日：埋戻し、重機搬出、26日：仮設トイレ撤去

山野貝塚第７次調査

12月15日：環境整備、トレンチ掘削、仮設トイレ設置、16日：測量、トレンチ設定、雨天のため途中作業中止、17日：トレンチ掘削、18日：トレンチ掘削、貝層サンプル採取、写真撮影、19日：実測図作成、写真撮影、22日：トレンチ掘削、埋戻し、24日：実測図作成、写真撮影、貝層剥ぎ取り、25日：実測図作成、埋戻し、環境整備、機材搬出、仮設トイレ撤去

中六遺跡第20次調査

１月16日：基準点測量、仮設トイレ設置、19日：環境整備、重機搬入、写真撮影、トレンチ掘削、遺構確認作業、20日：トレンチ掘削、遺構確認作業、写真撮影、実測図作成、21日：雨天のため現場作業午後中止、トレンチ掘削、遺構確認作業、写真撮影、実測図作成、遺物取り上げ、22日：雨天のため現場作業中止、23日：トレンチ掘削、遺構確認作業、写真撮影、図面実測、26日：トレンチ掘削、遺構確認作業、写真撮影、実測図作成、埋戻し、27日：トレンチ掘削、遺構確認作業、写真撮影、実測図作成、埋戻し、28日：トレンチ掘削、遺構確認作業、写真撮影、実測図作成、埋戻し、29日：トレンチ掘削、遺構確認作業、写真撮影、実測図作成、埋戻し、30日：雨天のため現場作業中止、２月２日：埋戻し、陥穴精査、写真撮影、実測図作成、環境整備、機材撤去、３日：埋戻し、仮設トイレ撤去

３．調査組織

調 査 主 体　袖ケ浦市教育委員会

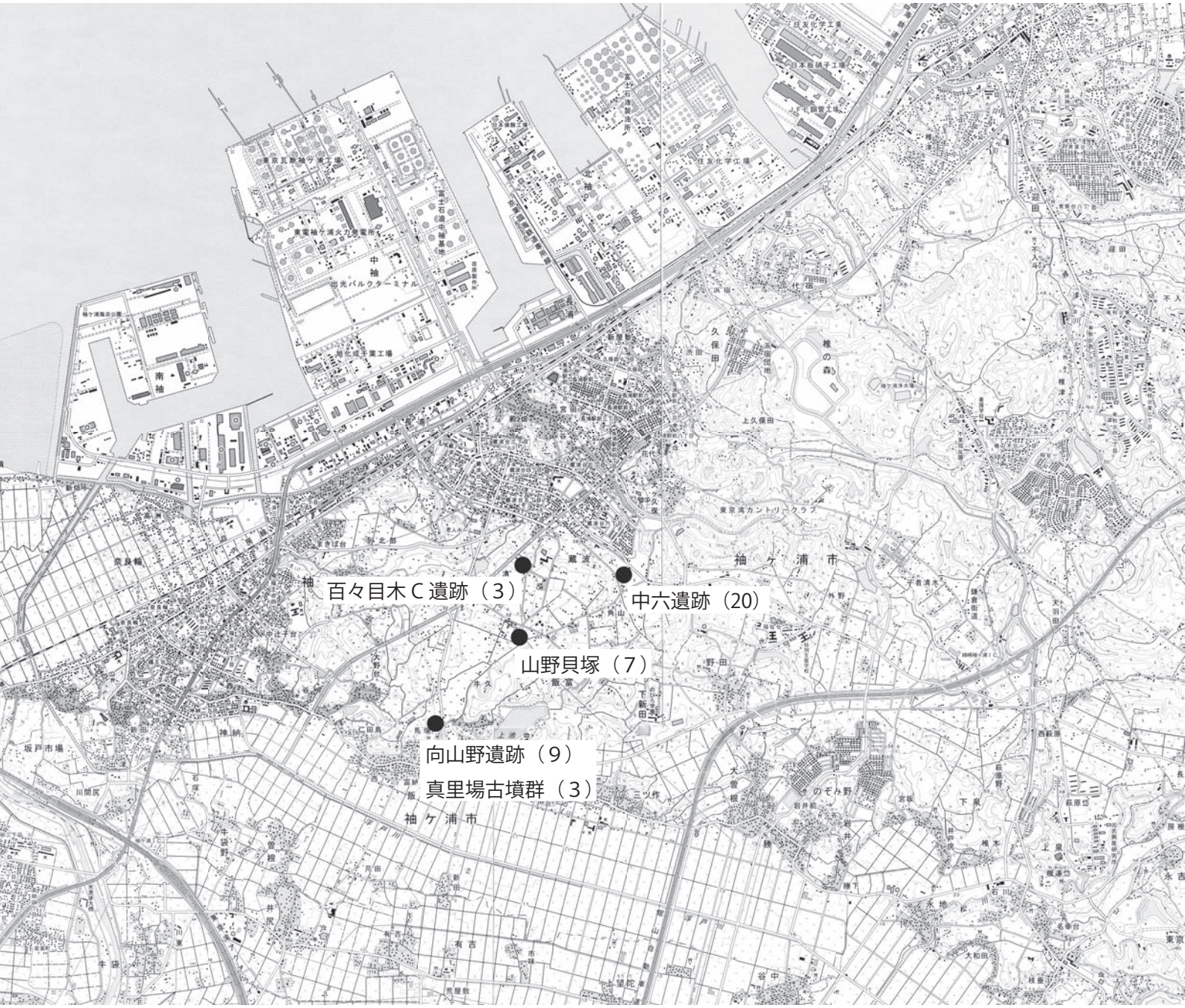
教　育　長　　川島　悟　　教育部長　　蔭山　弘

教育部次長　　鈴木　和博

教育部参事兼生涯学習課長　　井口　崇

副　課　長　　西原　崇浩　　副　主　幹　　諸墨　知義

副　主　査　　田中　大介　　副　主　査　　前田　雅之



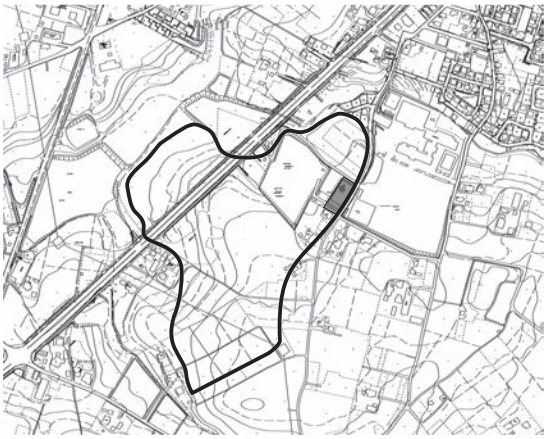
第１図　調査遺跡位置図(1：50,000)

第２章　百々目木Ｃ遺跡第３次調査

１．周辺の遺跡と環境（第２図）

百々目木Ｃ遺跡は境川最上流左岸の標高約32mの台地上に位置する。遺跡は境川によって開析された樹枝状の台地平坦面と境川に向かって傾斜する東側斜面部に立地することになる。

本遺跡はこれまで２度の調査が実施された。第１次調査は遺跡北東側の緩斜面部の調査で、縄文時代早期条痕文器の炉穴21基、陥穴６基等が検出された。第２次調査は東側緩斜面部の調査で、遺構は確認されなかったものの、縄文時代早期撚糸文系土器、繊維入無文土器、条痕文土器が出土した。また、時期は不明確であるが、旧表土と新期テフラ層が良好に堆積していた。



第２図　百々目木Ｃ遺跡（３）周辺地形図
（1：8,000）

周辺の遺跡を概観すると、本調査区の北側に隣接する清水頭遺跡からは縄文時代早期条痕文期の炉穴がわずかに検出された。本遺跡の北東約700mのところには、縄文時代早期茅山式期の大規模炉穴群が検出された寒沢遺跡が所在し、西側約1.2kmのところには同じく縄文時代早期子母口式期を主体とする炉穴群が検出された中六遺跡が所在する。両遺跡は縄文時代早期において、境川、蔵波川水系の拠点となる遺跡である一方、本遺跡や清水頭遺跡はその周辺に所在する小規模な活動痕跡として位置づけられるものと考えられる。

２．調査と遺跡の概要（第３図、図版１－１～４）

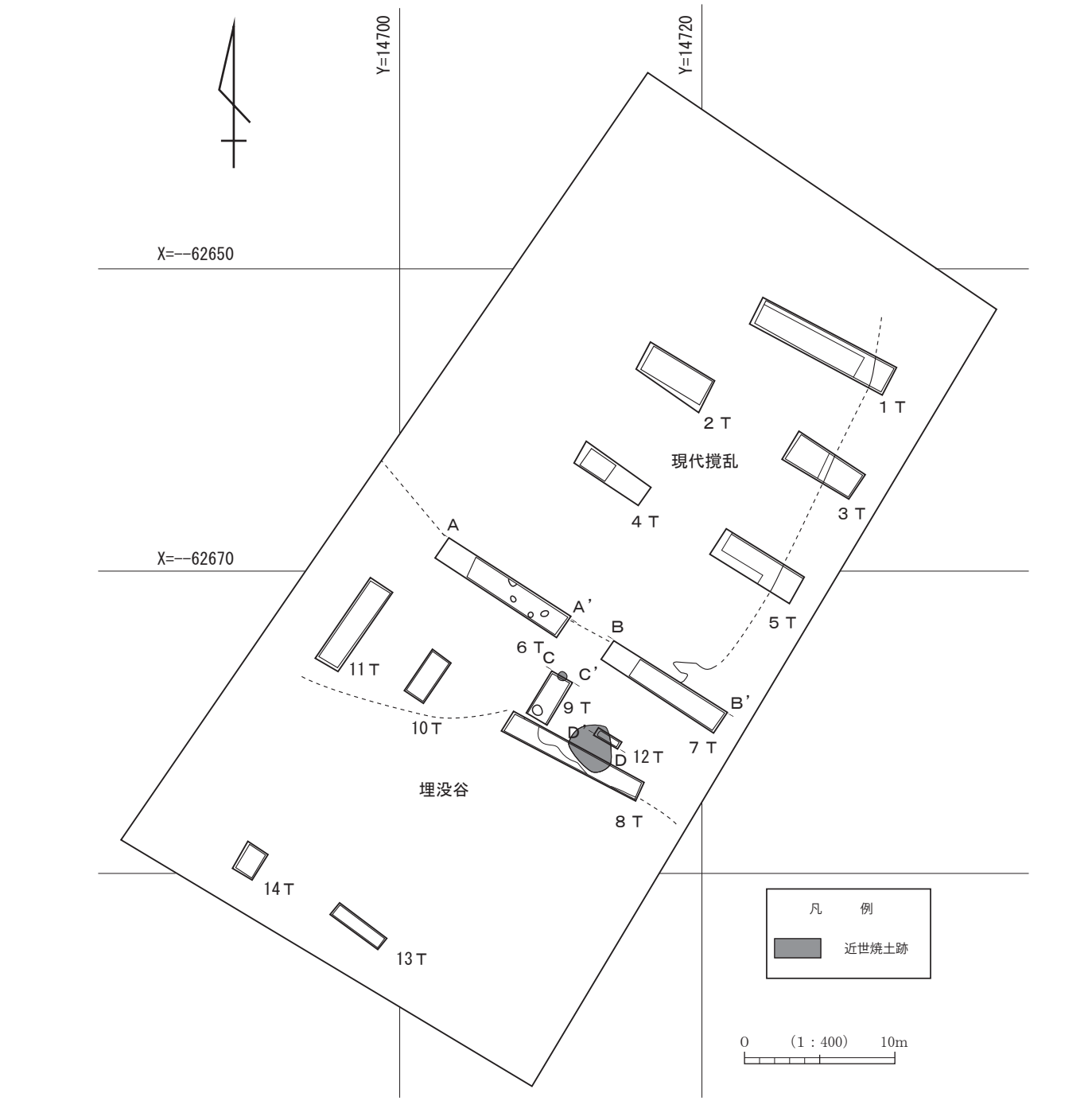
調査方法　調査は宅地造成事業に伴い1,725㎡を対象として実施した。調査面積は137㎡である。確認調査トレンチは調査対象範囲の形状に合わせて幅２ｍを基本として設定した。トレンチの掘削は重機により行い、遺構確認作業は人力により行った。遺構確認面はソフトローム漸移層とした。

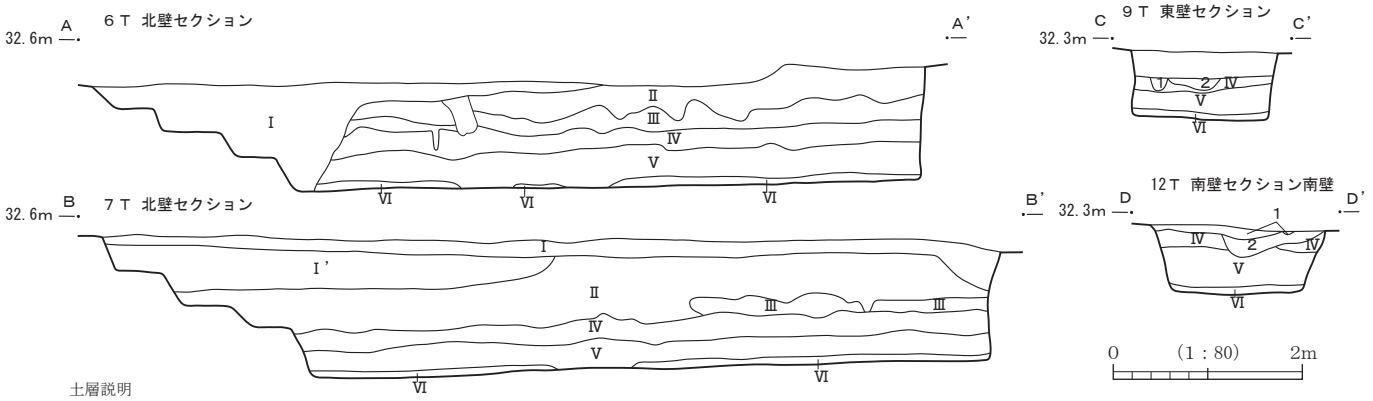
遺構・遺物　検出された遺構は、近世焼土跡２基で、遺物は出土しなかった。６・７トレンチ以北は現地表面から２ｍ程撹乱を受けており、６・７トレンチ付近が撹乱の境界となる。６・７トレンチ以南の土層堆積は厚く、現地表面から１～1.3mで地山ローム層に達する。６・７トレンチでは現地表面から0.3～0.5mのレベルに新期テフラ層が0.2～0.25mの厚さで良好に堆積していた。

近世焼土跡は８・９・12トレンチ周辺で、Ｉ層の砕石層を除去した段階で検出された。８・12トレンチにまたがって検出された焼土跡は径３ｍ程の不整形で、９トレンチ北東端部で検出されたもう１基は直径0.6ｍ程の円形を呈する。いずれも掘り込み面は不明であるが、新期テフラ層を掘り込んでおり、土層断面上で確認できる深さは0.6m程である。

３．まとめ

今回の調査では近世焼土跡２基のみが検出され、遺物は出土しなかった。調査範囲北側の大半が大きく撹乱を受けている影響もあろうが、本遺跡の遺構は境川に面した北東側斜面部に集中するものと考えられる。





土層説明

Ⅰ．砕石層

Ⅰ'．黄褐色客土　ローム主体の客土

Ⅱ．黒褐色土　現代の廃棄物を含む客土

Ⅲ．黒褐色土　ローム粒、φ５㎜橙色ブロック少量含む

Ⅳ．暗黄褐色土　新期テフラ層

Ⅴ．暗褐色土　φ10㎜暗黄褐色ブロック多量に含む

Ⅵ．暗褐色土　φ10～20㎜ロームブロック少量含む

１．黒褐色土　焼土粒少量含む

２．暗褐色土　焼土粒、φ３～５㎜焼土ブロック多量に含む。φ３㎜炭化物少量含む。

第３図　百々目木Ｃ遺跡（３）遺構確認状況図

第３章　向山野遺跡第９次調査・真里場古墳群第３次調査

１．周辺の遺跡と環境（第４図）

向山野遺跡は、小櫃川に面する標高約34 ～ 39mの台地上に位置し、幅広い台地平坦面の広範囲に遺跡が展開し、真里場古墳群を包括する。これまでに８回の発掘調査が実施され、弥生時代後期～古墳時代中期の竪穴住居や真里場古墳群の部分的な調査が進められてきた。

２．調査と遺跡の概要（第５図、図版１－５～８）

調査方法　調査は、個人住宅建設に伴うもので、331㎡を調査対象として実施した。本調査区の東側の市道建設に伴い昭和63年度に発掘調査が実施されている。その調査では真里場古墳群第10号墳とした円墳が確認されており、その周溝の一部が調査区内へ連続していることが想定された。

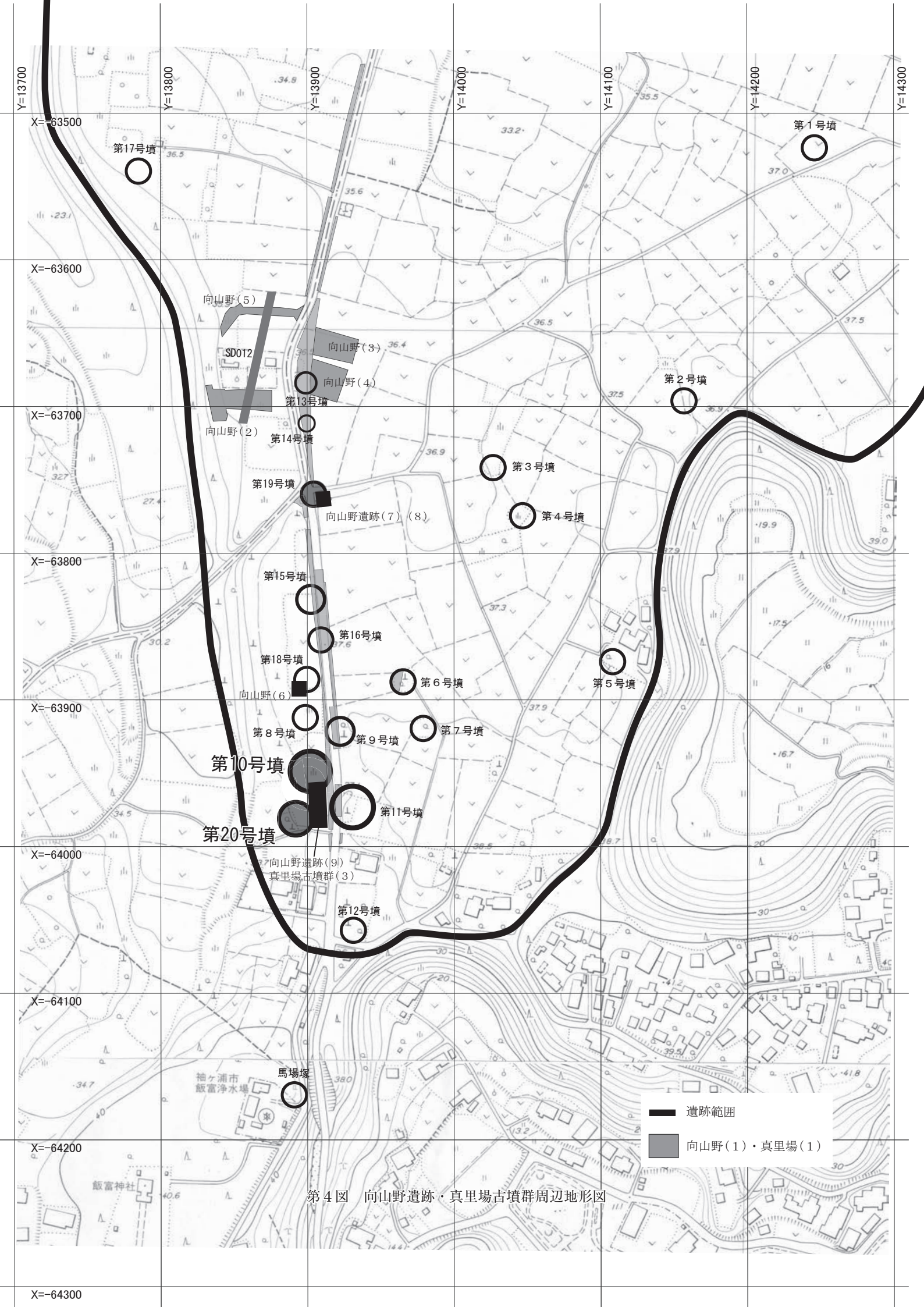
その成果を踏まえた上で確認調査トレンチは、調査区に沿った状態で南北方向のトレンチを設定することとし、全部で４本のトレンチを設定した。北西側のトレンチを１Ｔ、北東側を２Ｔ、南西側を３Ｔ、南東側を４Ｔと呼称する。トレンチの面積は全部で47㎡を測る。調査区の現状は畑である。

トレンチの掘削は重機により行い、遺構確認作業は人力により行った。過去の調査成果から古墳の存在が窺えたことから、南北に長いトレンチを設定することとした。

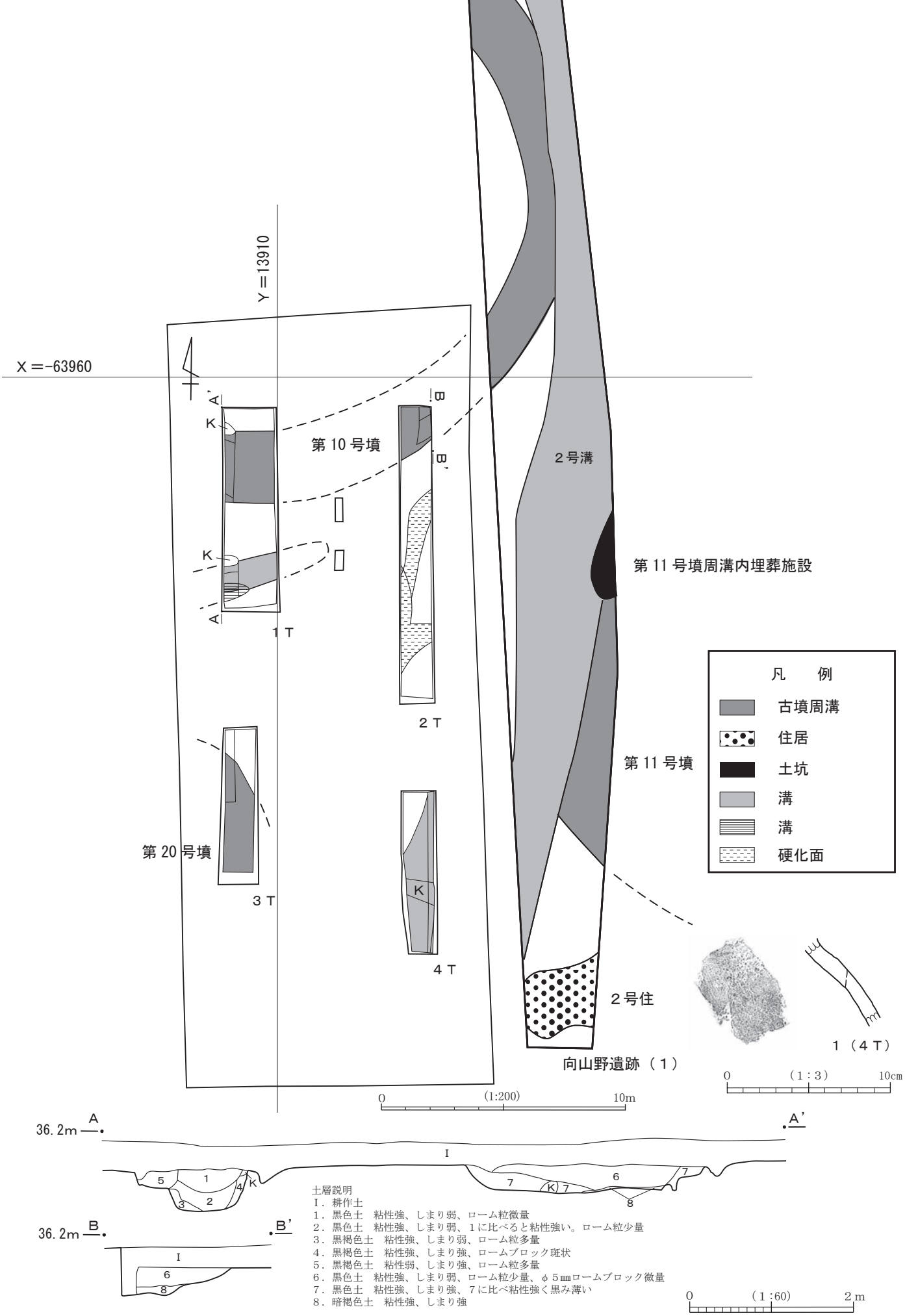
遺構・遺物　遺構は円墳２基の周溝と古墳時代と考えられる溝１条、近代の溝１条を確認した。１Ｔと２Ｔで確認した周溝は、昭和63年度に調査を実施した第10号墳の周溝である。１Ｔで確認した周溝は幅2.9mで、底面まで深さ33㎝を測る。堆積土は黒色土を主体する。昭和63年度の調査では周溝の深さが50 ～ 60㎝程であったことから、畑の耕作等により遺構確認面が削平されていることがわかる。遺構確認面はソフトローム層上部であったことからも削平されていることが理解できる。１Ｔでは第10号墳の南側にも黒色土が主体的に堆積する溝を確認した。当初は古墳の周溝と想定したが、溝は幅が狭い逆台形で鋭角に立ち上がり、１Ｔ内で途切れることから、古墳時代に属する溝と想定した。２Ｔでは、北端で第10号墳の一部が確認でき、中央部から南側で道路の硬質面も認められた。道路の硬質面は、枝分かれしているように窺えた。３Ｔでは古墳周溝と考えられる溝を確認した。４Ｔの溝は、昭和63年度調査で確認していた２号溝である。各トレンチから出土した遺物の量は、次のとおりである。１Ｔは古墳時代土師器片が２点・11.19ｇ、３Ｔは古墳時代土師器片が出土していたが、調査中に紛失してしまった。４Ｔは出土した遺物が最も多く、17点・148.07ｇの古墳時代土師器片が出土し､そのうちの１を図示した。１は壷の頸～肩部片である。時期は不明であるが、古墳時代前期であろうか。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。内面に輪積が残る。

３．まとめ

第11号墳の周溝内土坑からは直刀や鉄鏃が出土しており、５世紀代の古墳と想定される。北側に位置する第18号墳は周溝内から６世紀後葉の土師器が出土したことから、古墳時代中期から後期に造営された古墳群であると考えられ、第10号墳についてもその時期の範囲内であろう。第20号墳については、墳丘側内縁部を確認していないが、現状では円墳として捉えるものである。１Ｔの溝については、暫定的に古墳時代の溝としたが、溝の立ち上がり部が鋭角であることから、奈良時代の方形区画墓の溝の可能性も考えらえるところである。しかしながら、それに対応するような溝がないので古墳時代の溝に位置づけることとする。



第４図　向山野遺跡・真里場古墳群周辺地形図



第5図　向山野遺跡（9）・真里場古墳群（3）遺構確認状況図、出土遺物実測図

第４章　山野貝塚第７次調査

１．周辺の遺跡と環境（第６図）

山野貝塚は、小櫃川水系の支流によって開析された標高約36mの台地上に立地する。遺跡南側に入り込む谷は、現在埋め立てられてしまったが、本来は台地上との比高差が約10mを測る比較的深い谷となっていた。一方北側に目を転じると、境川水系の最上流に相当し、貝層範囲の北側約200mのところに浅い谷が入り込んでいる。これらのことから、山野貝塚は小櫃川水系と境川水系の分水嶺に立地することにもなる。

山野貝塚は縄文時代後・晩期の貝塚を伴う集落で、貝層の遺存状況が非常に良好である。貝塚は東西に140m、南北110mの範囲に展開する。弧状を呈する貝塚が東西に相対するように配置される相弧状を呈し、貝塚に囲まれた中央部分は窪地となり、貝塚頂部との比高は約1.2mを測る。本貝塚は縄文時代の貝塚が数多く分布する東京湾東岸地域において、最南端に現存する大型貝塚と位置付けられ、良好な遺存状況であることと併せて、東京湾東岸の貝塚群の中でも重要な遺跡となる。

周辺には同時期の遺跡が比較的多く所在する。浅い谷を隔てた東側隣接地には後期初頭から前葉を主体とする集落である伊丹山遺跡が所在する。山野貝塚に先行する遺跡として注目される。また、遺構は検出されていないものの、東側に隣接する角山遺跡からも後・晩期の遺物が出土している。小櫃川の支流を挟んだ南側約１㎞のところには後期前半を主体とする宮ノ越貝塚が所在する。正式な調査は実施されていないが、表採資料や踏査の結果から馬蹄形を呈する集落と考えられており、山野貝塚とは後期前葉段階で時期的に重複する。後期前葉には近隣に２つの大規模な貝塚が所在することとなり、その関係が興味深いところである。

山野貝塚ではこれまで６次にわたる調査が実施されている。昭和48年の第１次調査は鉄塔建設に先立つ調査で、東側貝層の中心部分を調査した。大量の獣魚骨類が出土し、調査時に詳細に取り上げられていることから、山野貝塚を考えるうえでの非常に重要な資料となる。平成４年には千葉県内主要貝塚の１つとして調査され、詳細なボーリング調査により貝層堆積範囲が明らかになるとともに、貝層の内外に効果的に設定されたトレンチ調査により山野貝塚の概要を把握することができた。この２つの調査により山野貝塚の重要性が明らかとなり、平成12年に袖ケ浦市指定史跡、平成21年に千葉県指定史跡に指定され、その重要性が周知されるとともに保護が図られてきた。その後、市では山野貝塚を国指定史跡として保護する方針となり、文化庁及び千葉県文化財課の指導の下、平成22年度以降保存目的のための範囲確認調査を４箇年に渡り実施し（第３～６次調査）、山野貝塚の遺跡範囲がおおよそ確定された。現在、山野貝塚の学術的価値を明らかにするための総括報告書を作成するとともに、国指定に向けた準備を進めているところである。

２．調査と遺跡の概要（第７～12図、図版２～４）

調査目的　調査は国指定史跡を目指す山野貝塚において、その学術的価値を明らかにするための資料の蓄積を目的として実施した。今回の調査課題は以下の３点となる。

①南側貝層の貝層サンプルの採取

これまで貝塚の東西及び北側の貝層サンプルが採取されていたが、南側においてはサンプルの採取がなされていなかったために、その採取を目的として実施した。また、これまでのサンプルからは当時の植生復元を考えるうえで重要な微小貝類の採取を行ってこなかったので、微小貝を採取することも併せて目的とした。

②貝層断面の剥ぎ取り

山野貝塚では、昭和48年と平成４年に貝層部分の調査が実施されたが、その際、貝層断面の剥ぎ取りを行わなかった。そこで本調査では、今後の調査研究や活用のために貝層断面の剥ぎ取りを行うこととした。

③中央窪地の土層断面の確認

前述したように、貝層の内側は窪んだ地形を呈しており、その成因を考える資料を得るために中央窪地部分の調査を実施した。調査範囲の一部をローム層以下まで深く掘り下げ、土層堆積状況の観察を実施した。

いずれの調査も遺跡の損壊を最小限に止めるために、平成４年に実施された10トレンチと12トレンチ（以下、Ｈ４-10Ｔ、Ｈ４-12Ｔと表記）の再調査という形で実施した。両トレンチは千葉県指定史跡範囲内に所在することから、調査に先立ち千葉県教育委員会に史跡の現状変更の申請を提出して調査を実施した。

調査方法　過去の調査トレンチは、平成24年度に実施した第４次調査時に設定した基準点をもとに光波測距器を用いて位置出しした。調査トレンチの大まかな位置を確認後、Ｈ４-10Ｔについては、貝層が検出されたトレンチ北側の幅２ｍ、長さ４ｍの範囲を調査対象とした。Ｈ４-12Ｔについてはトレンチ中央部の２×２ｍを調査対象とした。両トレンチとも人力で掘削を行った。Ｈ４-10Ｔに関しては、平成４年の調査では貝層の上面確認を行い、西壁に沿った幅0.3ｍのサブトレンチ部分のみ0.6～１ｍ掘り下げ、貝層の堆積を確認していた。本調査では、貝層断面の剥ぎ取りを考慮して、サブトレンチをさらに0.3ｍ東側に拡張し、その拡張範囲の一部で貝層サンプルの採取も行った。なお、サブトレンチについては遺構も含めて地山ローム面まで調査を実施した。排土は土層ごとに現場で４㎜メッシュのふるいをかけ、細かな遺物の回収を行った。Ｈ４-12Ｔに関しては、２×２ｍの調査対象範囲を全体的に0.3ｍ程掘り下げた後、南西側の４分の１の１×１ｍの範囲をさらに１.1ｍ程掘り下げ、土層断面の観察を行った。

整理作業においては、トレンチの層位ごとに遺物を分類、計測し、遺物出土傾向の把握に努めた。自然遺物については、サンプル資料は、9.5㎜、4.0㎜、2.0㎜、1.0㎜メッシュのふるいで水洗し、各メッシュごとに資料を採取するとともに、浮遊した微小貝についても採取した。分類については、整理期間の関係上、9.5㎜と4.0㎜資料のみを対象とした。貝類は個体として把握できるものは同定し、２枚貝については左右を分類し最少個体数を把握した。骨は、筆者のわかる範囲で獣骨と魚骨に分類したのみである。現地採集資料についてはすでに現場において4.0㎜メッシュのふるいでふるったため、4.0㎜で採取された資料を同様に処理した。

遺構・遺物

Ｈ４-10Ｔ（第８図）　調査の結果、堀之内式期の住居１軒以上、土坑１基、ピット３基が検出された。また、再調査範囲北側で貝層の堆積が確認され、２箇所で貝層サンプルを採取した。

ＳＩ-９　ＳＩ-９は再調査トレンチの南側の貝層の堆積が薄いところで検出された。地山ローム面から0.15ｍ上部で貼床が確認され（３層）、前回の調査で検出された炉もこの床面に伴うものと考えられる（第８図左上図参照）。トレンチ内で立ち上がりは確認されていない。Ｐ３・４は住居に伴うピットと考えられる。出土遺物は堀之内１式土器79.13ｇ、堀之内２式土器67.89ｇである。貼床直上から第11図23・24の土器が出土した。23は堀之内１式期の深鉢の胴部片で、24は堀之内２式期の深鉢底部と考えられる。24は接合しないものの、貼床上とＰ３覆土中に分布している。貼床下のＰ５は灰層を含む落ち込みである。Ｐ４に切られることから、別の住居の炉の可能性もある。

ＳＫ-14　ＳＫ-14はトレンチの北端で検出された。全体形状は不明だが、南東―北東方向に軸を有すると考えられる。西壁断面を見ると土坑の立ち上がりは10、11層を切り込み、９層の加曽利Ｂ式期の貝層に切ら

れており、現状の深さは0.54mを測る。加曽利Ｂ式期の貝層を介在しているため、ＳＩ-９との切りあい関係は不明瞭であるが、土層断面をみると３層の床面がＳＫ-14まで入り込んでいないため、ＳＫ-14の方が新しいと考えられる。出土遺物は中期末葉加曽利ＥⅣ式土器36.26ｇ（第10図13）、堀之内１式土器166.82ｇ（第10図14 ～ 18）、堀之内２式土器29.62ｇ（第10図19）、縄文のみ施される土器74.45ｇ（第10図20）、貝製品１点（第12図48）である。本遺跡から加曽利ＥⅣ式の土器が出土することはあまり多くなく、しかも遺構から検出されており、東側に隣接する伊丹山遺跡との関係を考えるうえで興味深い。第12図48の貝製品は現地4.0㎜メッシュのふるいで検出された。イモガイの螺頭部を素材とし、全面を研磨し明瞭に面取りがなされボタン状を呈する。

ピット　ピットはサブトレンチ中央部分で検出された。Ｐ１は底面がローム層に達しないピットで９、15、16層の貝層から一体化した形で検出された。ピット上層の貝層も含めて貝層サンプルを採取しており（Ｂサンプルあ～か、以下（あ）と表記）、サンプル（あ）から加曽利Ｂ２式土器（第11図21）、サンプル（え）から加曽利Ｂ２～３式と考えられる土器が出土した（第11図22）。その他、加曽利Ｂ式期に比定される紐線文系土器が１点出土した。土器の他に、不明骨製品１点、貝刃３点がサンプル（え）から出土した。貝刃はいずれもシオフキを素材とする。Ｐ２は最上層にＳＩ-９の貼床が確認されたため、ＳＩ-９よりも古い。確認面からの深さが４㎝程の非常に浅いピットで、堀之内１式土器が32.25ｇ出土した。

貝層　貝層はＳＫ-14の覆土である14層、その上部に堆積する12、13層と、ピット周辺の９、15、16層で確認された。これらについては前述したように現場で4.0㎜メッシュのふるいを用いて大型資料の回収を行った。貝層サンプルは12、13層部分（Ａサンプル）と９、15、16層付近のＰ１（Ｂサンプル）の２箇所で採取した。また、トレンチ及びサブトレンチを埋め戻した１層からも多くの遺物が出土した。これらの埋戻し土は12層と見分けが不明瞭であり、一部12層と混在している可能性もある。以下、層位ごとに内容を説明する。

１層　前述したように直下の12層が一部混在している可能性もある。出土した土器は後期前葉から晩期前葉までと幅広い。第11図25 ～ 28は堀之内１式土器、29は加曽利Ｂ式土器、30、31は紐線文＋条線文＋縄文土器、32、33は安行１式土器、34は安行３a式土器か、35は安行３ｂ式土器である。その他、安山岩製の石皿１点（第12図42）、砂岩製の砥石１点（第12図40）が出土している。遺物に関して特筆すべき点として貝刃が８点出土したことが挙げられる。内訳はハマグリ１点、カガミガイ７点となる。貝組成は、ツメタガイが33.6％と最も多くなり、他の貝層とは全く異なる。次いでハマグリ、イボキサゴ、シオフキ、アカニシの順で続く。アカニシが多い点も他の貝層とは異なる。

12層　12層は表土下の土層で、層厚は0.25mを測る。出土した土器は、堀之内１式～加曽利Ｂ式で、堀之内１式が最も多くなる（表１、第10図１～８）。１～６は堀之内１式土器で、７は堀之内２式土器である。８は後述するＡサンプルの最上層である①から出土した。横位に数条の沈線が巡り焼成が堅緻であることから加曽利Ｂ式期の土器と捉えた。また、山形土偶の脚部（第12図39）が壁面に突き刺さった状態で出土した。山形土偶は加曽利Ｂ式期に盛行する土偶であることから、本貝層の形成時期は加曽利Ｂ式期と捉えられる。左脚で内側以外に単節ＲＬ縄文を施した後、足首と膝部分に横位沈線をめぐらす。なお、12層と13層の境界からは、石皿２点（第12図41・43）と磨石１点が出土しており、この面で何らかの行為が行われた可能性も考えられる。41は大形の石皿の破片で、およそ1/4が遺存すると思われる。安山岩の礫を素材とし、表裏両面及び縁辺を使用する。図上左面は中央が椀状に大きく窪み、その上部も椀状に窪む。一方下側は皿状を呈し、中央部が著しく研磨される。図上右面は全体的に大きく窪み、上側縁辺の一部が著しく研磨される。皿の中央付近は両面からの使用により著しく薄くなっており、おそらく中央部をブリッジ状に残し上下に穴が開い

ていたと考えられる。43は片岩性の石皿である。器面が著しくもろくなっている。また、現地のふるいにおいて、第12図44の骨製のヤス状刺突具が検出された。おそらくシカの四肢骨片を素材とし、著しく研磨を施し尖頭状の先端部を作出している。先端部には横方向の線条痕が認められる。基部側は欠損している。その他、カガミガイを素材とした貝刃が１点出土した。貝類は上層の埋戻し土と混在してしまったためか、マガキ１点しか検出されていない(表４)。その他、獣骨が31点、魚骨が34点出土した。

13層　13層は、12層と14層に挟まれた層厚約0.2mの層で、ＳＫ-14の覆土に相当する。出土した土器は12層と同様に堀之内１式～加曽利Ｂ式で、堀之内１式が最も多くなるが、出土量自体は12層の35％程と少なくなる（表１、第10図９～12)。９、10は堀之内１式土器、11は堀之内２式土器、12は縄文のみ施文される土器片である。その他磨石の破片が１点、焼成粘土塊が１点出土した。貝類はイボキサゴが62.6％と最も多く、次いでハマグリ7.1％、シオフキとツメタガイが6.6％となる。その他獣骨９点、魚骨３点が検出された(表４)。

14層（ＳＫ-14）　前述した堀之内式期の土坑覆土である。貝類はシオフキが43.6％、イボキサゴが28.5％、ハマグリが10.3％、マテガイが5.5％、ツメタガイが2.4％となる。他の貝層と比べイボキサゴ以外の割合が高くなっている(表４)。その他獣骨８点、魚骨10点が検出された。

Ａサンプル(表６)　サブトレンチ拡張部中央で採取した。採取量は、30×30×５㎝を基本単位とし、５カット採取し、上からＡ①～Ａ⑤と付番した。①②は12層、③は12～13層、④は13層、⑤は10・13層に相当する。基本的に上層から下層に向かって貝の量が減少する傾向にある。組成はイボキサゴが最も多く、次にシオフキ、ハマグリが続く傾向にも変わりが見られないが、④、⑤はイボキサゴの割合が低下する。その他に骨も出土しているが上層の①～③までは比較的多く検出されているが、④、⑤は著しく減少している。これらは現地採集資料の12層から13層にかけての変化と一致している。

Ｂサンプル(表７)　貝層南側のＰ１とその上部の貝層を採取した。採取方法はピットの堆積に沿って５～８㎝単位で採取し、(あ)～(か)の番号を付番した。(あ)のみピット南端を一括して採取している。ピット部分で述べたように、出土遺物から本貝層は加曽利Ｂ式期に形成されたものと考えられる。基本的に、サンプル(あ)以外、イボキサゴが７割近くを占め、次いでシオフキ、ハマグリとつづき、３種でおよそ９割を占める。サンプル（あ）ではシオフキが46.4％とイボキサゴを上回る。また、今回は殻長を計測していないが、サンプル(あ)に限って、シオフキの殻長が２㎝未満の小型のものが多い傾向にある。サンプル(あ)以外の組成はさほど変わらないが、密度については、Ａサンプルよりは密であり、さらに上下層よりも中層の密度が高い傾向にある(表５)。

Ｈ４-12Ｔ（第９図）　中央窪地の土層堆積状況を確認するために、ローム層以下をおよそ1.1m掘り下げ土層断面の観察を行った。表土下0.2mで旧表土と想定される３層の黒褐色土が0.1mの厚さで堆積しており、その下には４層の漸移層が0.05m程堆積しローム層に至る。ローム層以下の層位については、比較的判別が容易なＡＴを含むいわゆる立川ローム層のⅥ層を基準として判断した。その結果、Ⅵ層に相当する層が７層となり、漸移層である４層下面からの深さが0.25mとなる。山野貝塚の東に近接する角山遺跡では、近年旧石器時代の調査が実施されており、平均して漸移層下0.58mでⅥ層となることが確認されている。また、山野貝塚から北西に600m程離れたところに所在する百々目木Ｂ遺跡や北東約1.2㎞所在する中六遺跡では、漸移層下0.5mでⅥ層に到達している。これらのことから、本土層確認部分においては、ローム層上部のおよそ0.25mが何らかの要因によって消失していると考えられる。本遺跡の７層上に堆積している５、６層はそれぞれ立川ローム層のⅣ、Ⅴ層に対応する土層であり、いわゆるハードローム層に相当するが、５層については、ソフト化していた。また、本来は赤色ブロックを含むところであるが、それらが認められなかった。

このことから、立川ローム層のⅢ層が何らかの要因によって消失し、本来硬質であるⅣ層も何らかの要因によってソフト化していると考えられる。1～3層中から、安行1式土器29.87ｇ（第11図36）、安行3a式土器9.84ｇ（第11図37）、紐線文＋条線文が施される土器28.97ｇ（第11図38）、条線文のみ施される土器8.17ｇが出土した。当該期の遺跡の窪地部分からは後期後葉以降の比較的新しい時期の土器が出土する傾向にあり、今回出土した土器もその傾向と一致する。

39Ｔ（第８図）　Ｈ４-10Ｔの位置出しをする際に誤って掘削してしまった新規のトレンチである。当初の排土は埋戻し土として廃棄してしまったため、貝層の大部分をふるいにかけていない。基本的にＨ４-10Ｔの北側土層堆積と同様の堆積状況を示していると考えられ、ＳＫ-14が39Ｔまで繋がっている可能性が考えられる。出土した遺物は、堀之内１式土器514.29ｇ、堀之内２式土器66.47ｇ、縄文のみ施される土器183.21ｇ、カガミガイ製の貝刃１点である。

３．まとめ

当初の目的に対する成果を挙げてまとめとしたい。

①南側貝層の貝層サンプルの採取

Ｈ４-10Ｔサブトレンチ拡張部の２箇所でサンプルを採取した。Ａサンプルは貝層の密度が薄いＳＫ-14の覆土を主体に採取したサンプルである。出土遺物から、12層は加曽利Ｂ式期で、13層以下は堀之内式期という時期差が認められた。貝の組成には大きな差がないが、13層よりも12層の方が貝の密度がやや高く、獣魚骨も多く含まれる傾向にあった。Ｂサンプルは加曽利Ｂ式期のピットを含む貝層を採取した。Ａサンプルに比べ密度が高く、一部に小形のシオフキが集中するという特徴が認められた。

近隣に位置する２箇所のサンプルであるが、これまで得られなかった加曽利Ｂ式期のサンプルが採取されたという点で重要な成果となった。今後４トレンチ、11トレンチ、ＳＩ-２で採取された堀之内式期のサンプル資料と比較することにより、時期による貝層形成の相違が見えてくる可能性がある。また、採取された微小貝は、山野貝塚の自然環境を復元するための貴重な資料となる。

②貝層断面の剥ぎ取り

Ｈ４-10Ｔの調査終了後、サブトレンチの東西及び北壁の貝層断面の剥ぎ取りを実施した。山野貝塚のみならず、市内貝塚の貝層断面剥ぎ取りの初例であり、今後の調査研究、活用に役立てていく必要がある。

③中央窪地の土層断面の確認

Ｈ４-12Ｔを深く掘り下げ土層断面観察を行った結果、立川ローム層最上層のⅢ層が何らかの要因によって消失していることが判明した。当該期の中央窪地を有する遺跡について、その形成が自然的な要因によるものかあるいは人為的要因によるものかという議論がなされてきているところであるが、今回の調査成果は窪地の形成要因を考えるうえでの重要な成果となった。本遺跡では昭和48年の第１次調査において北東方向から入り込む浅い谷を埋めるローム質の２次堆積土が確認されている。当時は注目されていなかったが、いわゆる縄文時代の「盛土」に相当する可能性もあり、その供給元が中央窪地である可能性も考えられるようになった。

表１　出土遺物一覧表(縄文土器)　　凡例　　単位：ｇ、縄＝縄文、紐＝紐線文、条＝条線文

グリッド 遺構	加曽利E	堀之内1	堀之内2	加曽利B	安行1	安行3a	安行3b	縄	紐縄	紐縄条	紐条	条	その他	不明	合計
H4-10T 1層		814.20	92.12	189.70	63.41	17.35	19.78	539.99	7.30	123.46		14.05	63.93	113.62	2,058.91
H4-10T 12層		612.94	53.24	26.17				109.12						249.60	1,051.07
H4-10T 13層		126.99	35.78	10.78				74.45						101.92	349.92
SI-9		79.13	67.89												147.02
SK-14	36.26	166.82	29.62					84.14						23.82	340.66
P1		23.63		18.47						10.28					52.38
P2		32.25													32.25
H4-12T					29.87	9.84					28.97	8.17		52.16	129.01
39T		514.29	66.47					183.21							763.97
表採		26.03	65.39												91.42
合計	36.26	2,396.28	410.51	245.12	93.28	27.19	19.78	990.91	7.30	133.74	28.97	22.22	63.93	541.12	5,016.61

表２　出土遺物一覧表(縄文土器以外)

トレンチ 遺構	土製品				石器								骨角貝歯牙製品							
	土偶		焼成粘土塊		磨石		石皿		砥石		礫		骨製尖頭器		不明骨製品		貝製垂飾品		貝刃	
	点数 (点)	重量 (g)	点数 (点)	重量 (g)	点数 (点)	重量 (g)	点数 (点)	重量 (g)	点数 (点)	重量 (g)	点数 (点)	重量 (g)	点数 (点)	重量 (g)	点数 (点)	重量 (g)	点数 (点)	重量 (g)	点数 (点)	重量 (g)
H4-10T1層							1	1514.14	1	63.60	14	190.21							8	180.32
H4-10T12層	1	52.3					2	2114.67			5	17.06	1	1.08					1	24.41
H4-10T13層			1	9.92	1	147.12					1	0.97								
SK14											3	2.17					1	0.18		
P1															1	0.54			3	11.66
H4-12T											10	64.65								
39T											1	6.45							1	35.38
合計	1	52.3	1	9.92	1	147.12	3	3628.81	1	63.60	34	281.51	1	1.08	1	0.54	1	0.18	13	251.77

表３　貝刃属性表　※刃部形態・刃部位置は『千葉東南部ニュータウン 19　千葉市有吉北貝塚Ⅰ』に基づく

掲載番号	遺構 グリッド	貝種	左右	遺存度	殻長(㎜)	殻高(㎜)	重量(g)	刃部形態	刃部位置	ふるい	備考
第14図-45	H4-10T1層	ハマグリ	左	一部欠損	(68.23)	64.75	23.11	①	b－？		
第14図-46	H4-10T1層	カガミガイ	左	ほぼ完形	70.39	63.4	26.86	②	c－d’		
第14図-47	39T	カガミガイ	左	完形	73.29	70.62	35.38	⑤	d－e’		
図版4掲載外1	H4-10T12層	カガミガイ	右	完形	63.29	56.25	24.41	③	c－e’	9.5	Aサンプル①
図版4掲載外2	H4-10T1層	カガミガイ	左	完形	66.97	63.88	30.53	②	c－c’		
図版4掲載外3	H4-10T1層	カガミガイ	左	完形	71.58	66.87	34.57	②	c－c’		
図版4掲載外4	H4-10T1層	カガミガイ	右	完形	60.46	57.12	17.45	②	c－c’		
図版4掲載外5	H4-10T1層	カガミガイ	左	完形	59.23	57.57	19.14	②	c－d’		
図版4掲載外6	H4-10T1層	カガミガイ	左	完形	53.9	50.84	9.39	②	d－？		
図版4掲載外7	H4-10T1層	カガミガイ	左	一部欠損	(55.26)	60.9	19.27	—	？－d’		
図版4掲載外8	P1	シオフキ	右	完形	44.83	36.64	5.25	④	b－b’	9.5	Bサンプルえ
図版4掲載外9	P1	シオフキ	右	完形	31.75	35.89	2.79	④	b－b’	9.5	Bサンプルえ
図版4掲載外10	P1	シオフキ	左	一部欠損	(32.15)	36.69	3.62	④？	b－？	9.5	Bサンプルえ

表４　出土貝類一覧表(現地採集資料)

遺構名	サルボウ		マガキ		シオフキ		バカガイ		マテガイ		カガミガイ		アサリ		ハマグリ		オオノガイ		イタボガキ		イボキサゴ	ウミニナ	ツメタガイ	アカニシ	イボニシ	アラムシロ	バイ	ツノガイ科	その他	破片（g）	獣骨	魚骨	合計最少個体数
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右													
H4-10T 1層	25	31	2		33	24	3	2	2		14	8			47	49		1			46		117	32	7	3	8			449.06			348
H4-10T 12層			1																											3.12	31	34	1
H4-10T 13層	2	1	1	2	12	12	2				4	3	1	4	7	13	3	2		1	114	3	12		5		2		3	269.3	9	3	182
SK014（14層）	3	7	1		70	72			9	2					17	15	4	1			47	2	4	1					1	292.32	8	10	165
39T	1	1													1								2				1			2.31			5
合計最小個体数	41		6		117		5		11		18		4		80		8		1		207	5	135	33	12	3	11		4	1016.11	48	47	701

表５　貝層サンプル内容物集計

サンプル名	水洗前重量（g）	水洗後残留物(g) 9.5mm	4.0mm	2.0mm	1.0mm	計（g）	土壌重量（g）	混土率（%）
A①	2796.00	248.95	157.19	89.69	62.71	558.54	2237.46	80.02%
A②	2575.00	232.11	121.67	58.48	42.49	454.75	2120.25	82.34%
A③	2666.00	195.37	82.36	—	—	277.73	2388.27	89.58%
A④	982.00	52.98	30.72	15.11	10.82	109.63	872.37	88.84%
A⑤	1322.00	11.19	20.11	11.94	14.22	57.46	1264.54	95.65%
Bあ	2412.00	227.72	193.21	155.99	82.37	659.29	1752.71	72.67%
Bい-1	652.00	105.57	134.90	52.21	34.23	326.91	325.09	49.86%
Bい-2	2392.00	704.57	471.55	177.13	105.11	1458.36	933.64	39.03%
Bう	1412.00	517.38	249.45	95.48	47.91	910.22	501.78	35.54%
Bえ	3156.00	1141.91	438.55	174.61	94.09	1849.16	1306.84	41.41%
Bお	2776.00	910.06	447.51	176.23	89.37	1623.17	1152.83	41.53%
Bか	1332.00	375.80	181.50	—	—	557.30	774.70	58.16%

表６　出土貝類一覧表（Aサンプル）

サンプル名	サルボウ		マガキ		シオフキ		バカガイ		マテガイ		カガミガイ		アサリ		ハマグリ		オオノガイ		イタボガキ		イボキサゴ	ウミニナ科	ツメタガイ	アカニシ	イボニシ	アラムシロ	バイ	ツノガイ科	不明巻貝	微小貝	破片（g）	獣骨	魚骨	合計最少個体数
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右														
A①		1		1	3	5	2	1		2	1	1				1		1			35	3	1	1	1	3	1		1		201.71	12	41	60
A②	3				2	5		1		1		1			2	1	1	4			57	4	3		2	1		1	1		157.5	10	31	86
A③	3	1			4	1									1	2					34		2		2					2	80.67	8	35	49
A④						2									3	3					2		2								30.43	3	8	9
A⑤					1		1							1	3	1					6										21.67	4	5	12
合計最小個体数	7		1		17		4		3		2		1		11		5				134	7	8	1	5	4	1	1	2	2	491.98	37	120	216

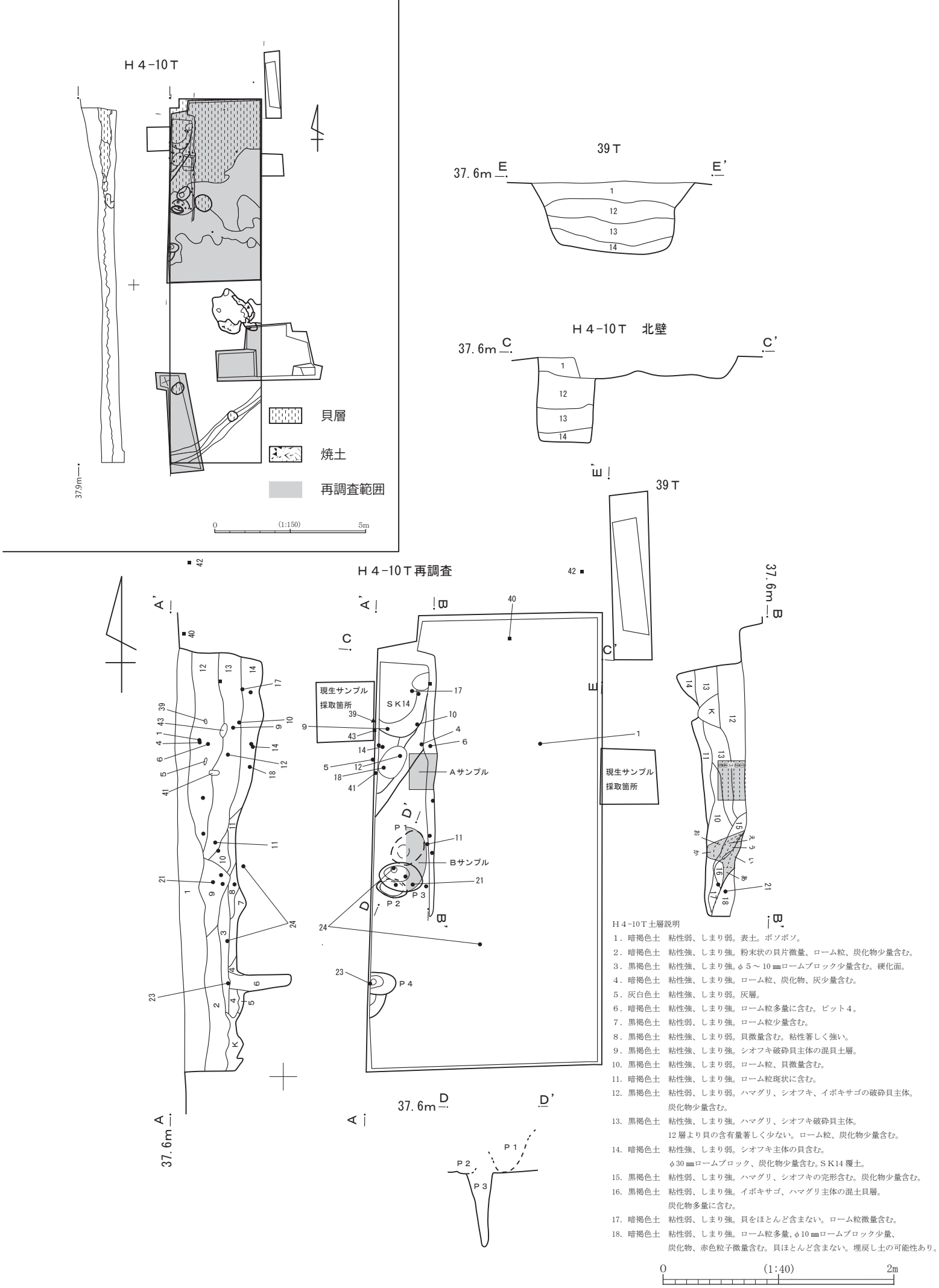
表７　出土貝類一覧表（Bサンプル）

サンプル名	サルボウ		マガキ		シオフキ		バカガイ		マテガイ		カガミガイ		アサリ		ハマグリ		オオノガイ		イタボガキ		イボキサゴ	ウミニナ科	ツメタガイ	アカニシ	イボニシ	アラムシロ	バイ	ツノガイ科	ミスジマイマイ	不明2枚貝	不明巻貝	微小貝	破片（g）	獣骨	魚骨	合計最少個体数
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右																
Bあ					61	65			1	1			2	2	9	12	6	4			47	1	2	2			1					1	215.87	7	13	140
Bい-1			1	2	5	7			1					1	4	5					42		2							4			155.26	5		64
Bい-2		1	4	1	28	49	1	1	6	3	1		1	2	24	20		3			312		10	2	2	1							601.41	4	14	418
Bう			1	2	39	33			1	3			1	11	21	11	1				190		4	1	1	7			1				321.95	2	11	281
Bえ	1	2	1	3	66	72			17	13	2	1	2	3	25	30	4	1			410		13	1	3	15		1		1			573.85	11	21	577
Bお		1	6	1	75	95			22	22		1	2	2	28	20	3				468		11		2	15							581.05	9	13	654
Bか	2	1	2	1	43	25			8	11	1	1	2		4	9					162		3			2	1						238.43	3	6	238
合計最小個体数	6		19		370		1		61		5		23		129		17		0		1631	1	45	6	8	40	2	1	1	5	0	1	2687.82	41	78	2372

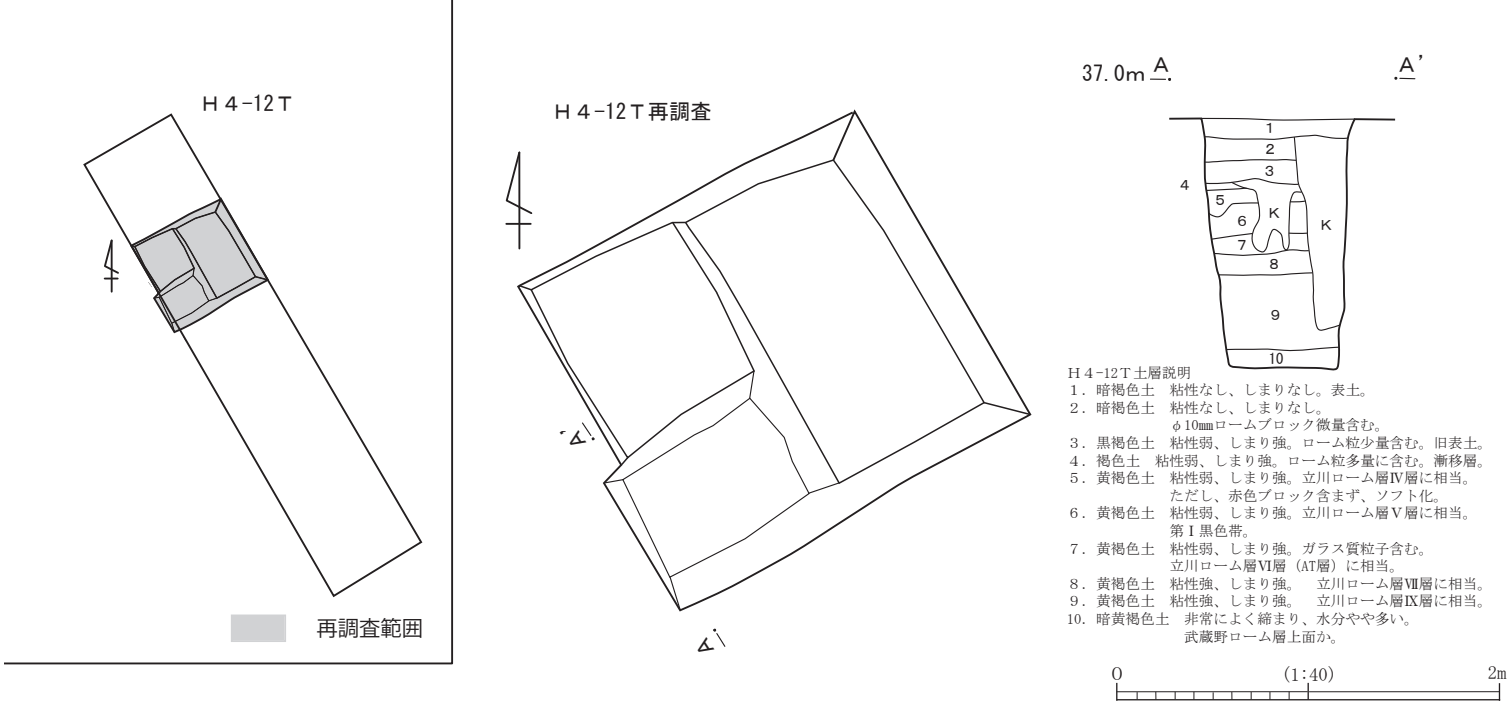
第６図　山野貝塚周辺地形図

貝層堆積範囲
貝層散布範囲
住居検出位置
山野貝塚（7）
1T
2T
3T
4T
5T
7T
8T
9T
10T
11T
12T
13T
14T
15T
16T
17T
18T
19T
20T
21T
22T
23T
24T
25T
26T
27T
28T
29T～32T
33T
34T
35T
36T
37T
38T
0
(1:1,500)
100m

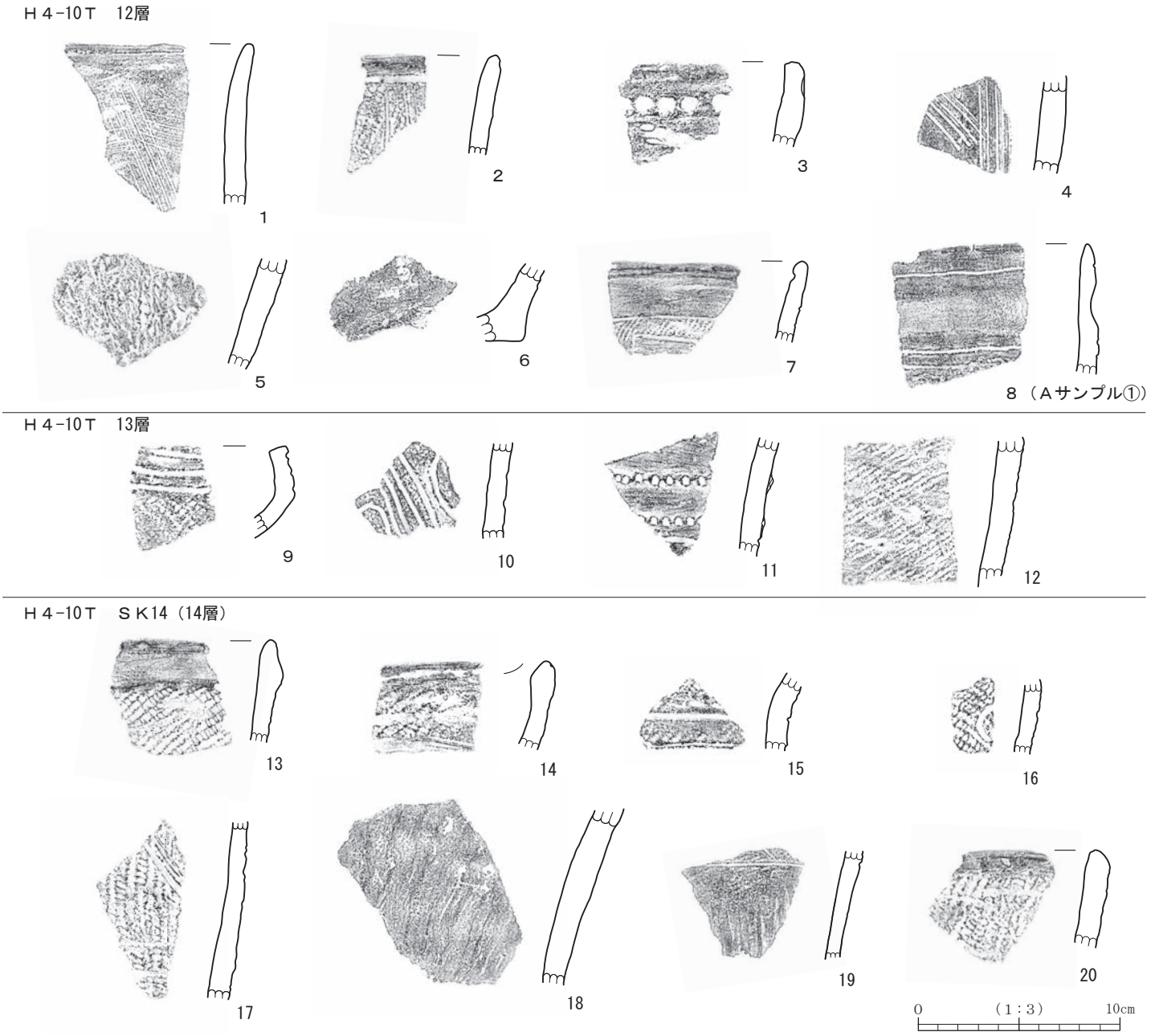
第7図　山野貝塚全体図



第８図　山野貝塚（７）Ｈ４-10Ｔ再調査実測図



第９図　山野貝塚(7)Ｈ４-12Ｔ再調査実測図



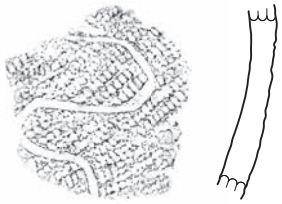
第10図　山野貝塚（７）出土土器実測図①

Ｈ４-10Ｔ　Ｐ１

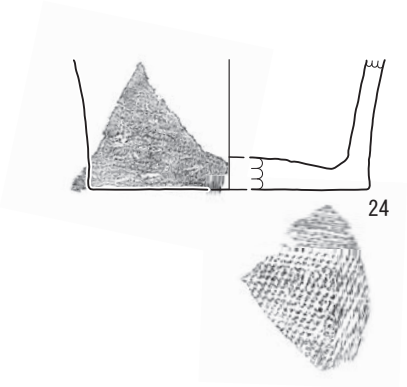
21（Ｂサンプルあ）

22（Ｂサンプルえ）

Ｈ４-10Ｔ　南側住居



23



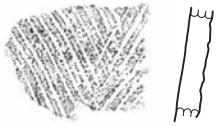
24

Ｈ４-10Ｔ　表採

25

26

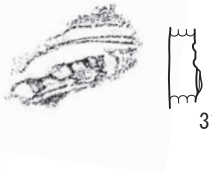
27



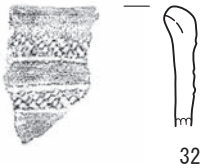
28

29

30



31



32

33

34

35

Ｈ４-12Ｔ　表採

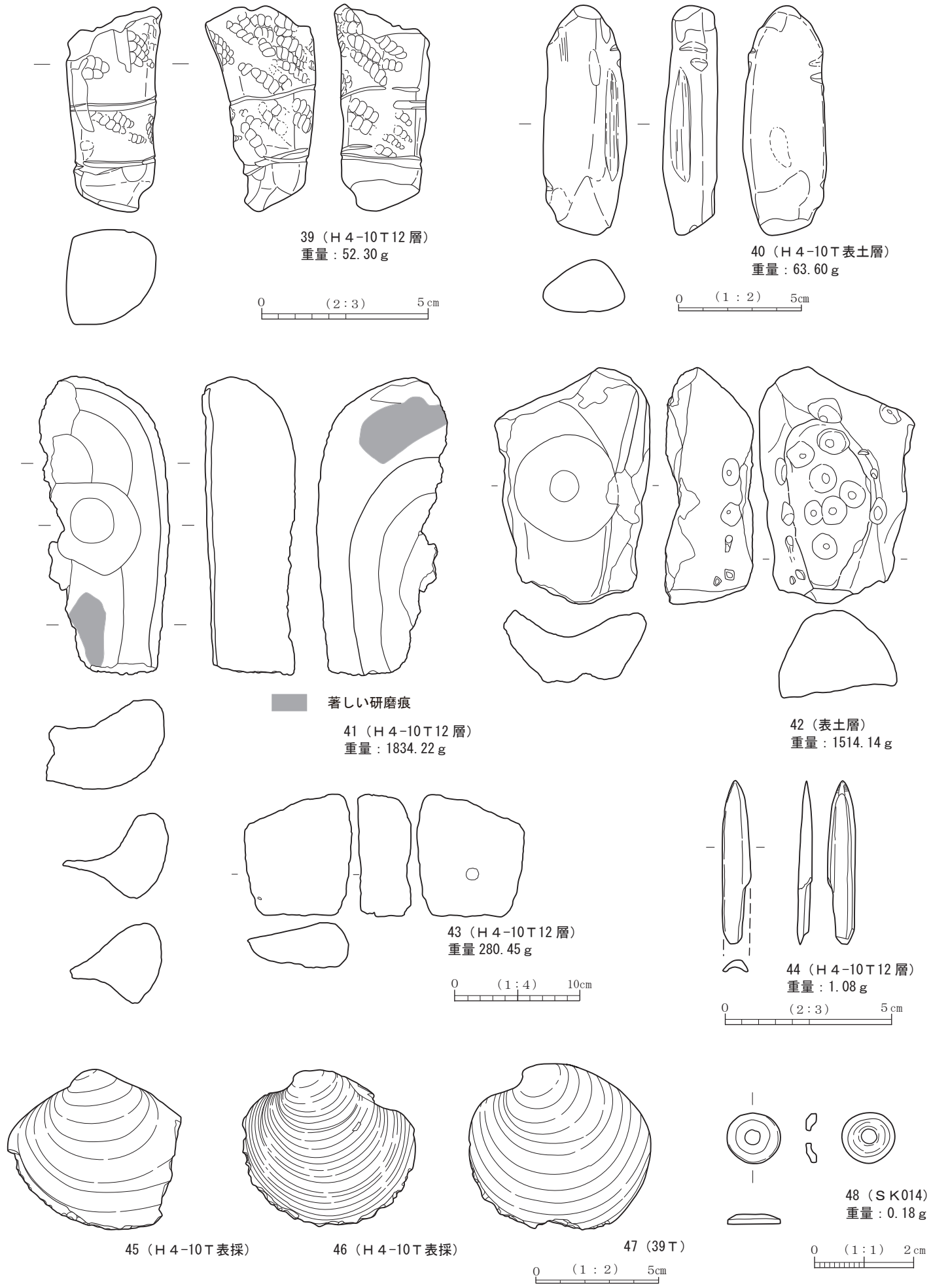
36

37

38

0　（1：3）　10cm

第11図　山野貝塚（７）出土土器実測図②



第12図　山野貝塚（７）出土土製品、石器、骨角貝製品実測図

第５章　中六遺跡第20次調査

１．周辺の遺跡と環境（第12図）

中六遺跡は、袖ヶ浦台地の中央部に位置し、蔵波川に北面する標高40m～45m程の平坦地に展開する。本遺跡はこれまでに、昭和61年から平成25年まで19回にわたり本調査・確認調査が実施された。発見された遺構は、旧石器時代石器集中箇所、縄文時代早期炉穴・陥穴・土坑、古墳時代前期竪穴住居・方形周溝墓、円墳・方墳等ある。今回の調査地点は遺跡範囲の西側で、現地形は南西方向に傾斜する緩斜面となっている。

２．調査と遺跡の概要（第13～15図、図版５）

調査方法　確認調査は、宅地造成事業に伴い12,198㎡を調査対象として実施した。調査トレンチは、世界測地系に基づく座標に従って打設した方眼杭により、南北５m間隔、東西８m間隔で２×５mの規模を基準に設定した。ただし、調査区北西側では立木、耕作物等のため、地割に合わせて調査可能な箇所にトレンチを設定した。トレンチの掘削は重機によって行い、遺構確認作業は人力によった。遺構確認面はソフトローム漸移層とし、ソフトローム層まで掘削した。なお、調査区東側には、南から貫入する幅約80m、深さ約1.7mの浅い谷を検出したが、耕作等の地形改変などのため、現在はほとんど埋没している。

遺構　陥穴１基を検出した。遺構番号は第18次調査の連続番号とした。

ＳＫ151　位置はＬ17－07・08・17・18グリッドで、調査区東側、南から貫入する埋没谷の谷頭部分に位置する。遺構はⅡｃ層から掘り込まれていた。主軸方向はＮ－56°－Ｗ。規模は長軸長2.31m、短軸長1.78m、深さ1.68m。底面形態は長方形。南西壁（長辺壁）の中央、底面から83㎝の位置に斜角ピット１基がある。径16㎝以上、深さ約20㎝を測る。ピットの斜壁ラインの延長は、Ⅱｃ層上面に達する。短軸断面形は壁中位から大きく開く漏斗状である。堆積土は底面から中位まではローム大中ブロック主体の埋戻し層（７～９層）で、その上は自然堆積層である。時期は出土遺物がなく不明であるが、縄文時代早期と考えられる。

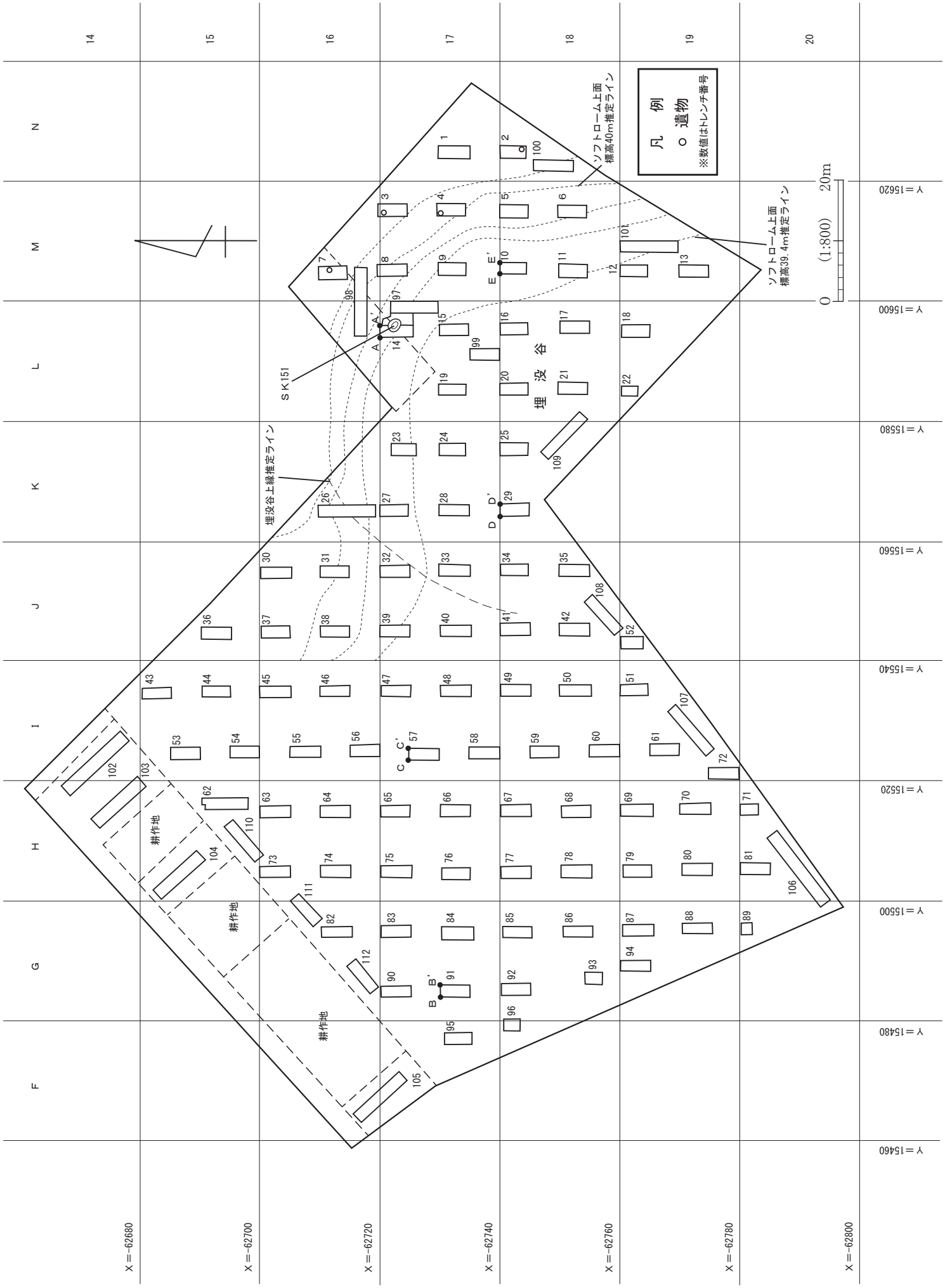
遺物　出土遺物は、縄文時代早期土器１点（5.78ｇ）、古墳時代前期土師器４点（30.37ｇ）、縄文時代石器１点（5.73ｇ）である。すべて細片で、攪乱層やソフトローム上面から出土した。１は縄文時代早期前半の深鉢の胴部破片で、撚糸文ｌが施文され、条間が狭い。色調は赤褐色で、胎土は白色粒子を多く含む。２は古墳時代前期土師器壺の頸部で、外面はタテミガキで、内面はヨコミガキである。色調は赤褐色～橙色で、胎土は白色・黒色・赤色粒子を含む。３は古墳時代前期土師器壺の体部。外面がナナメハケ目の後、タテミガキ調整。内面はヨコヘラナデ。色調は橙色～淡褐色。胎土は黒色粒子を多く含む。４は土師器高坏の脚部破片である。円形透穴が１か所認められる。外面タテミガキ、内面ナデ調整である。色調は褐色で、胎土は白色粒子を含む。５は縄文時代石器石核で、早期の所産と考えられる。黒曜石製。立方体状で、90°打面転移をし、細かな剥片を剥離している。長軸長2.2㎝、短軸長1.25㎝、厚さ1.7㎝を測る。

３．まとめ

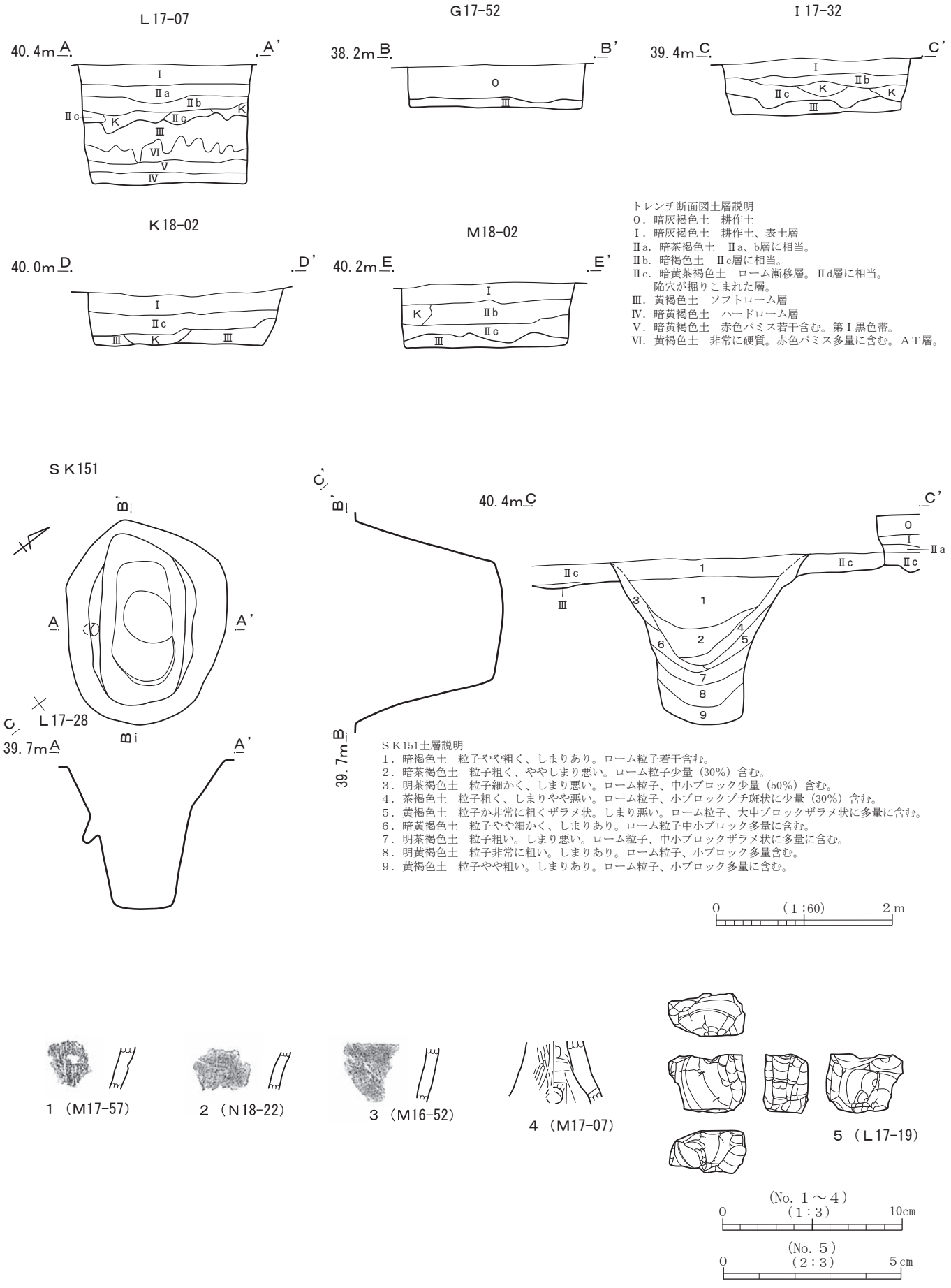
東側で発見された縄文時代早期と推定される陥穴１基を除き、調査区の大部分においては、遺構の検出はなかった。また、調査区西側のほとんどがソフトローム上面まで削られるほどの削平を受けている。遺物は２次移動した資料だが、東側北寄りの台地平坦面縁辺部で出土し、遺跡の南限を示している。

ＳＫ151で検出された長辺壁の小ピットは、市内上用瀬遺跡009号土坑でも確認され、遺構の立地も類似する。単なる足場材の固定穴とは思えず、陥穴の仕掛用の材を固定した穴の可能性も考えられる。

第13図　中六遺跡調査区位置図



第14図　中六遺跡(20)遺構確認状況図



トレンチ断面図土層説明
O．暗灰褐色土　耕作土
I．暗灰褐色土　耕作土、表土層
IIa．暗茶褐色土　IIa、b層に相当。
IIb．暗褐色土　IIc層に相当。
IIc．暗黄茶褐色土　ローム漸移層。IId層に相当。
　陥穴が掘りこまれた層。
III．黄褐色土　ソフトローム層
IV．暗黄褐色土　ハードローム層
V．暗黄褐色土　赤色パミス若干含む。第I黒色帯。
VI．黄褐色土　非常に硬質。赤色パミス多量に含む。ＡＴ層。

ＳＫ151土層説明
1．暗褐色土　粒子やや粗く、しまりあり。ローム粒子若干含む。
2．暗茶褐色土　粒子粗く、ややしまり悪い。ローム粒子少量（30%）含む。
3．明茶褐色土　粒子細かく、しまり悪い。ローム粒子、中小ブロック少量（50%）含む。
4．茶褐色土　粒子粗く、しまりやや悪い。ローム粒子、小ブロックブチ斑状に少量（30%）含む。
5．黄褐色土　粒子か非常に粗くザラメ状。しまり悪い。ローム粒子、大中ブロックザラメ状に多量に含む。
6．暗黄褐色土　粒子やや細かく、しまりあり。ローム粒子中小ブロック多量に含む。
7．明茶褐色土　粒子粗い。しまり悪い。ローム粒子、中小ブロックザラメ状に多量に含む。
8．明黄褐色土　粒子非常に粗い。しまりあり。ローム粒子、小ブロック多量含む。
9．黄褐色土　粒子やや粗い。しまりあり。ローム粒子、小ブロック多量に含む。

第15図　中六遺跡(20)トレンチ土層断面図、SK151実測図、出土遺物実測図

写　真　図　版

１～４　百々目木Ｃ遺跡（３）　５～８　向山野遺跡（９）・真里場古墳群（３）

1.百々目木Ｃ遺跡（３）７トレンチ土層堆積状況（南→）

2.百々目木Ｃ遺跡（３）８・９トレンチ遺構確認状況（南西→）

3.百々目木Ｃ遺跡（３）９トレンチ土層堆積状況（南西→）

4.百々目木Ｃ遺跡（３）調査風景（南東→）

5.向山野遺跡（９）･真里場古墳群（３）１トレンチ遺構確認状況（北東→）

6.向山野遺跡（９）･真里場古墳群（３）２トレンチ遺構確認状況（南西→）

7.向山野遺跡（９）・真里場古墳群（３）第10号墳周溝確認状況（南→）

8.向山野遺跡（９）･真里場古墳群（３）４トレンチ遺構溝確認状況（北→）

図版２

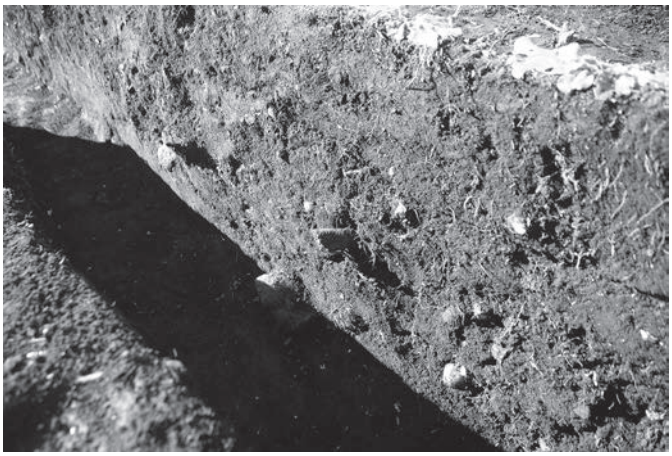
山野貝塚（７）①

1．H4-10Ｔサブトレンチ完掘状況（南→）

2．H4-10Ｔ再調査完掘状況（南東→）

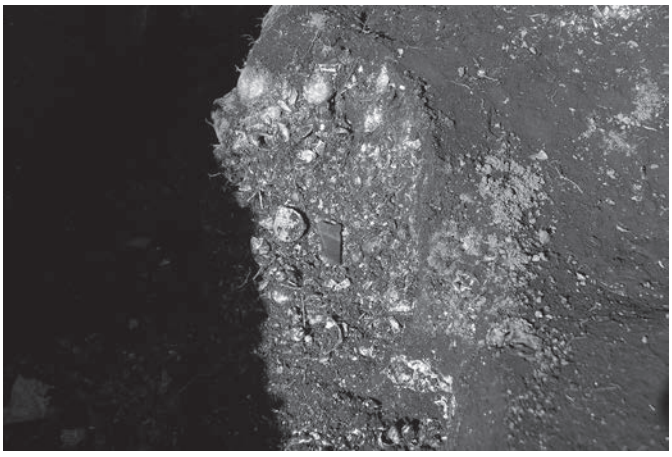
3．H4-10Ｔ再調査西壁土層堆積状況（南東→）

4．H4-10Ｔ再調査サブトレンチ東壁土層堆積状況（西→）



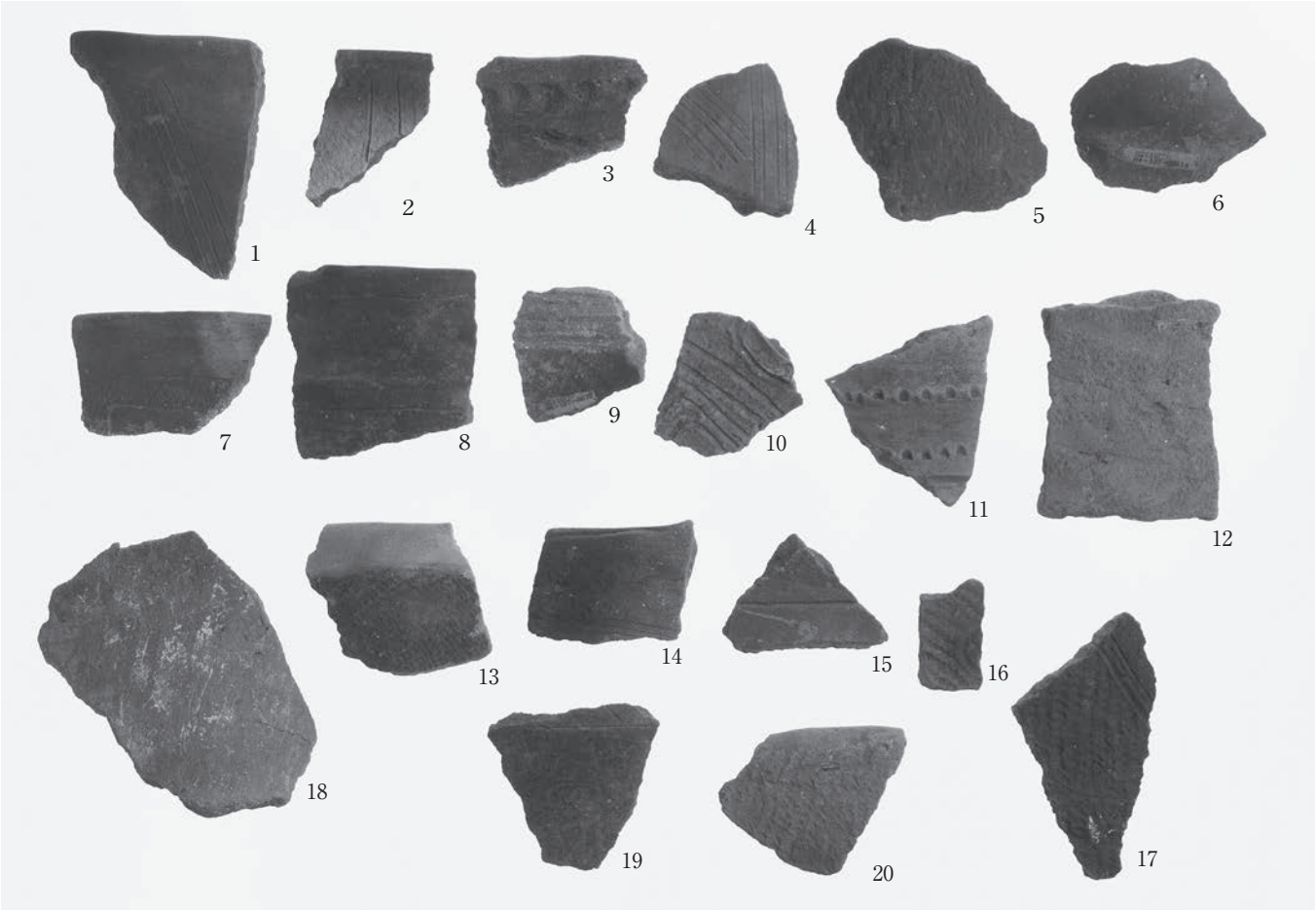
5．H4-10Ｔ再調査西壁土偶出土状況（北東→）

6．H4-10Ｔ再調査Ａサンプル遺物出土状況（東→）

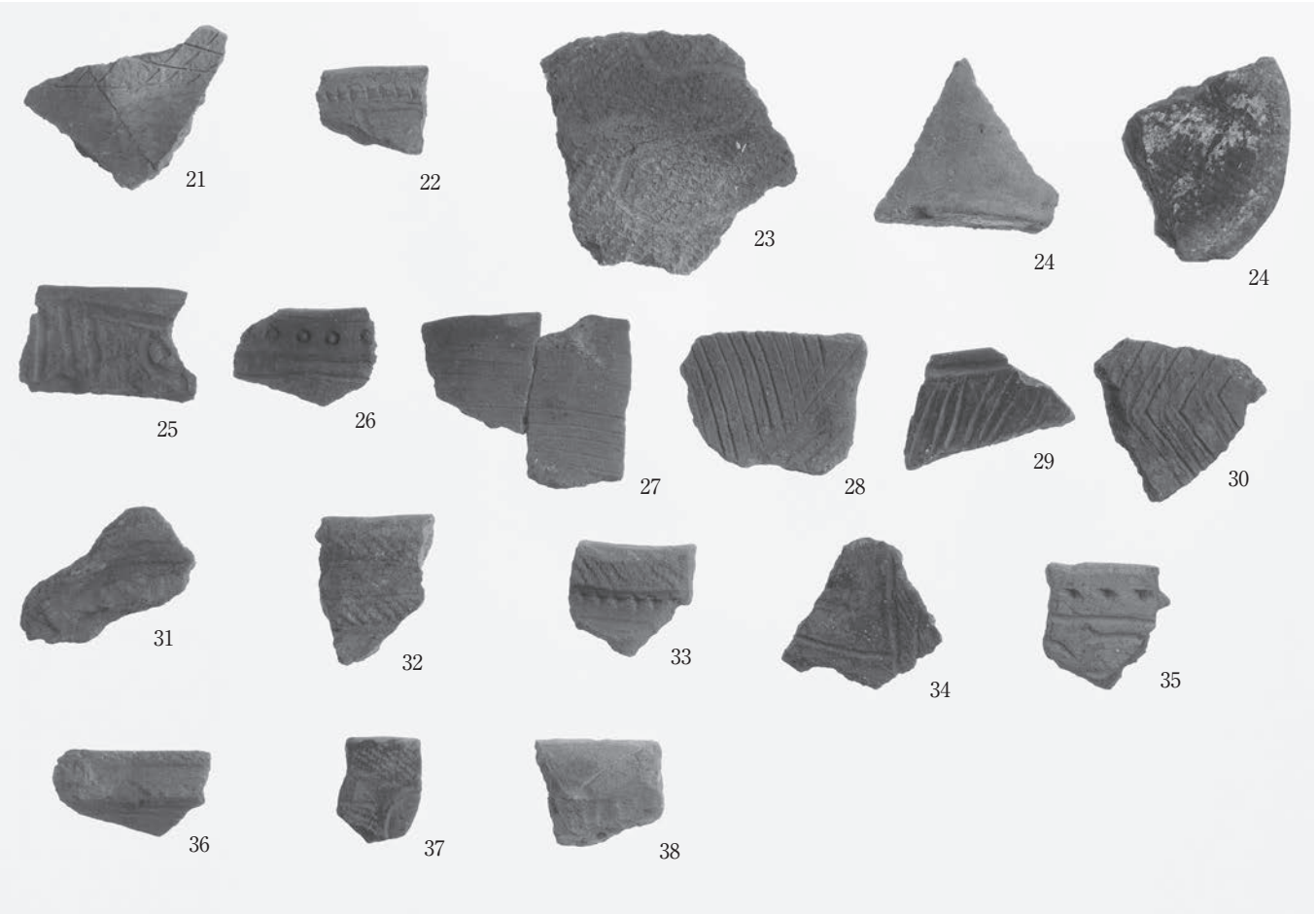


7．H4-10Ｔ再調査Ｂサンプル遺物出土状況（南→）

8．H4-12Ｔ再調査土層堆積状況（北東→）



1．出土土器①



2．出土土器②

図版４

山野貝塚（７）③　　出土土製品・石器・骨角貝製品

39 表

39 側面

40

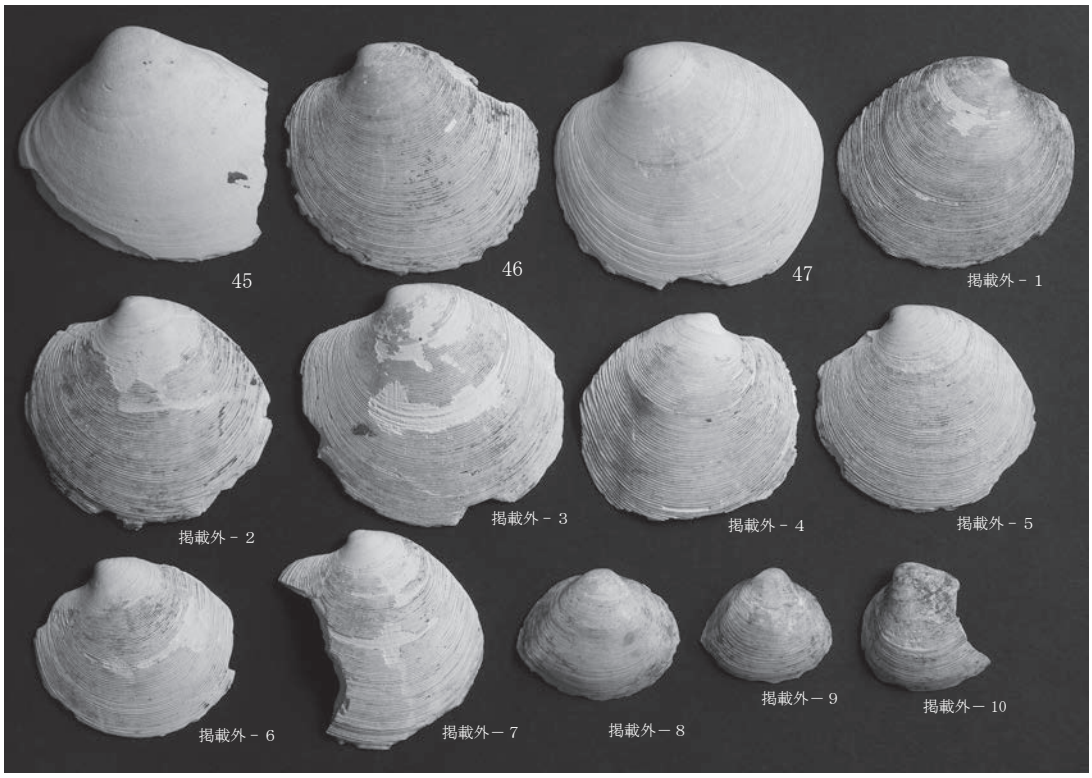
43

41 表

41 裏

42 表

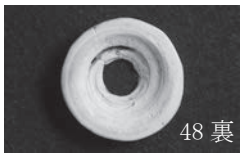
42 裏



44
表

44
裏

48 表


48 裏

1.調査前近景（南→）

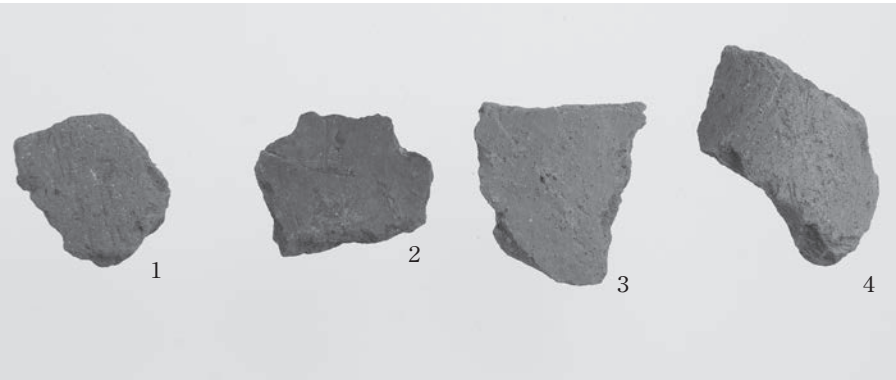
2.表土除去風景（南東→）

3. 調査風景（北東→）

4.調査区東側遺構確認状況（南→）

5.SK151完掘状況（南東→）

6.SK151土層堆積状況（西→）



7.出土土器

8.出土石器

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅうろくねんど　そでがうらしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	平成26年度袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書
副 書 名	百々目木Ｃ遺跡第３次調査・向山野遺跡第９次調査・真里場古墳群第３次調査・山野貝塚第７次調査・中六遺跡第20次調査
編著者名	西原崇浩・諸墨知義・田中大介（編）
編集機関	袖ケ浦市教育委員会
所 在 地	〒299－0292　千葉県袖ケ浦市坂戸市場１－１　℡0438-62-2111
発行年月日	西暦2015年３月27日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
百々目木Ｃ遺跡第３次調査	千葉県袖ケ浦市蔵波字中ノ代2,911番９他	12229	SG037	35°26’04”	139°59′31″	20140617～20140626	137㎡/1,725㎡	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
百々目木Ｃ遺跡	包蔵地	近世	焼土跡２基(近世)	なし	調査区南側から北側に向けて入り込む埋没谷には新期テフラ層が良好に堆積していた。焼土跡は表土層直下で検出され、新期テフラ層を掘り込んでいた。

要　約	遺跡の東側の調査である。調査範囲の大部分は撹乱を受けており、検出された遺構は近世の焼土跡２基のみであった。遺物は出土しなかった。

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
向山野遺跡第９次調査・真里場古墳群第３次調査	千葉県袖ケ浦市飯富字浜海道2,959番１	12229	SG029 SG114	35°25’31”	139°59′11″	20141020～20141027	47㎡/331㎡	確認調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特　記　事　項
向山野遺跡・真里場古墳群	包蔵地	古墳時代	古墳２基、溝３条（古墳時代１、近世～近代２）、道路遺構２条（近世）	縄文土器、古墳時代土師器	昭和63年度に調査した真里場第10号墳につながる周溝を確認した。

要　約	向山野遺跡南側の調査である。真里場古墳群は古墳時代中期から後期に造営された古墳群であると考えられ、第10号墳についてもその時期の範囲内であろう。第20号墳については、墳丘側内縁部を確認していないが、現状では円墳として捉えるものである。１Ｔの溝については、暫定的に古墳時代の溝としたが、奈良時代の方形区画墓の溝の可能性も考えられる。

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
山野貝塚 第７次調査	千葉県袖ケ浦市飯富 3,516 番８他	12229	SG110	35°25′49″	139°59′40″	20141215 ～ 20141225	14 ㎡／1,553 ㎡ 下層４㎡/1,553 ㎡	保存目的調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特　記　事　項
山野貝塚	貝塚	縄文時代	土坑１基、ピット５基（縄文時代）	縄文土器、縄文時代石器・骨角器	平成４年度に調査したトレンチの再調査。貝層部分の10Ｔでは加曽利Ｂ式期の貝層及び堀之内式期の土坑が検出された。12Ｔの下層調査において立川ローム層のⅢ層及びⅣ層上部の消失が確認された。

要　約	南側貝層及び中央窪地部分の調査である。調査は平成４年に調査したトレンチを再調査する形で実施した。南側貝層部分の再調査では、堀之内式期と加曽利Ｂ式期の貝層が検出された。本貝塚で加曽利Ｂ式期の貝層が明確に確認された初例となる。中央窪地部分の再調査では、立川ローム層上面のⅢ層とⅣ層の一部が消失していることが確認された。

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
中六遺跡 第20次調査	千葉県袖ケ浦市蔵波字木瓜代 3,001番５他	12229	SG013	35°25’47”	139°59’52”	20150119 ～ 20150203	1,230 ㎡ ／ 12,198㎡	確認調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特　記　事　項
中六遺跡	包蔵地集落跡	縄文時代、古墳時代	陥穴１基（縄文時代早期）	縄文土器、縄文時代石器、古墳時代土師器	調査区は南西に傾斜する緩斜面で、東側に南より浅い埋没谷が入る。北端の谷頭で縄文時代早期の陥穴１基を検出した。

要　約	遺跡西側部分の調査である。調査区東側で発見された縄文時代早期と推定される陥穴１基を除き、調査区内には遺構が検出されなかった。また、調査区西側のほとんどがソフトローム上面まで削られ削平を受けている。遺物は２次移動した資料だが、東側北寄りの台地平坦面縁辺部で出土し、遺跡の南限を示している。

2015 年 3 月 20 日　印刷
2015 年 3 月 27 日　発行

平成 26 年度
千葉県
袖ケ浦市内遺跡発掘調査報告書

百々目木Ｃ遺跡第３次調査　向山野遺跡第９次調査・真里場古墳群第３次調査
山野貝塚第７次調査　中六遺跡第20次調査

発行　袖ケ浦市教育委員会
〒 299 - 0292
千葉県袖ケ浦市坂戸市場１番地１
印刷　大和美術印刷株式会社
〒 292 - 0067
千葉県木更津市中央１－１－６